ISSN 0289-8772

The Community コミュニティ

1992
NO. 100

【特集】

日本のコミュニティ

この30年というもの、
日本のコミュニティは大きく変わった。
どのように変わったのだろう。
さまざまな問題をかかえるなかで、
コミュニティの再生が求められてる。

(財)地域社会研究所

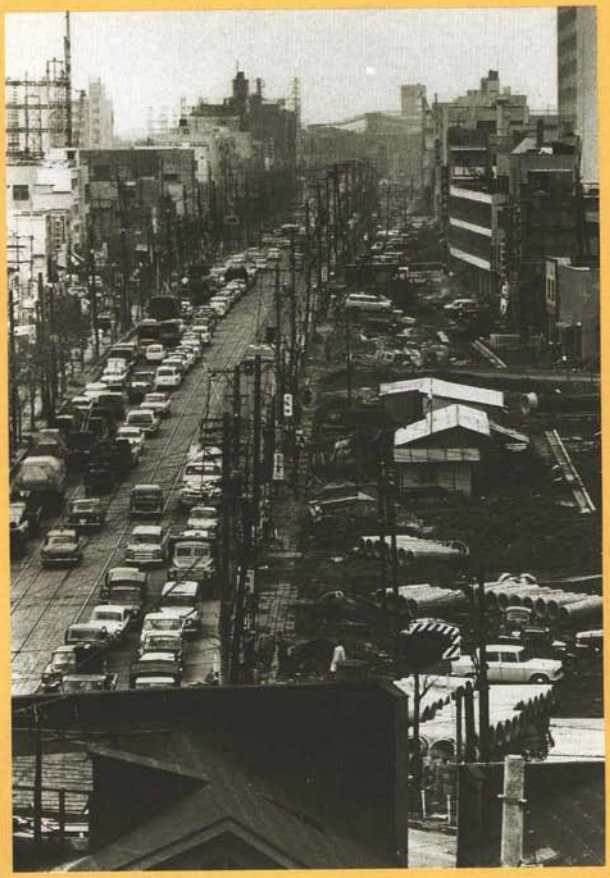
世界の街から
17

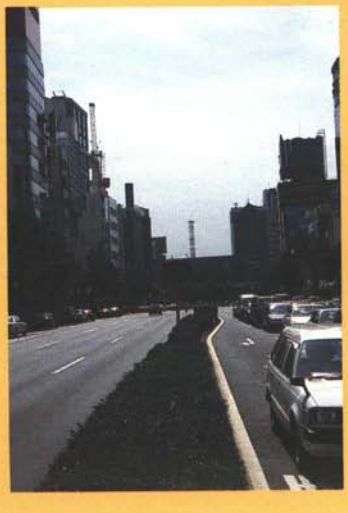
今は昔の30年前、あの街角で

ここに掲載した4点の写真は、30年ほど前の出来事を写したものである。40代以上の方なら「ああ、そんなことがあったな」と思い出されるに違いない。その同じ場所をたずねてみると、この30年の変化の大きさが改めて感じられる。

【東京オリンピックを前に拡幅工事が進む青山通り。1963年　東京都港区】

1964年に開かれた東京オリンピックは1兆800億円を投じた巨大プロジェクトだった。そのうち、首都高速道路などの道路関係1753億円、東海道新幹線3800億円。当時、「夢のハイウェー」と呼ばれた首都高速は、今では連日の渋滞。ともあれ、オリンピックは高度成長にはずみをつけ、夢の商品が「三種の神器」(洗濯機・冷蔵庫・テレビ) から「3C」(クーラー・カラーテレビ・カー) に移ったのも、そのころのことだった。





現在の青山通り

【アメリカ大使館前におしかけた「60年安保闘争」のデモ隊　1960年6月　東京都港区】

戦後日本は対外政策の軸を一貫して日米関係においてきた。ところが、マスコミの論調や世論は時に大きく「反米」に傾いた。日本がアメリカに匹敵する経済力をもつにいたり、冷戦構造も解消した今、日米関係にも転換が起こりつつある。

現在のアメリカ大使館前

【こちらはソ連、ボリショイサーカス団のデモンストレーション　1960年7月　渋谷駅前】

そのころ、ソ連は名実ともにスーパーパワーだった。音楽やスポーツ、そしてサーカスも超一流。技術分野では宇宙開発でアメリカをリードし、1962年には人類最初の宇宙飛行士であるガガーリンが来日して市民の熱烈な歓迎を受けた。そのソ連が崩壊の日を迎えようとは、だれが想像しえただろう。

現在の渋谷駅前

◎以上の写真は毎日新聞社提供

【神奈川県足柄上郡大井町　子どもたちの勤労奉仕】

この写真は、足柄峠に近い神奈川県大井町に第一生命の本社が移転(1968年)する前のもの。当時、大企業の地方移転の先駆的なケースとして注目された。が、その後、東京への集中はますます進み、地価高騰や交通渋滞の弊害は深刻。個別の役所や企業の地方分散だけでなく、首都そのものの移転問題まで論議されるようになってきた。

現在の大井町

◎写真提供＝田中聰一氏

The Community

1992 No. 100

(財)地域社会研究所

●口絵・世界の街から⑰「今は昔の三十年前、あの街角で」――1
●巻頭エッセー「競争」から「共生」へ　西尾信一――6
●特集「日本のコミュニティ」――9
座談会「コミュニティの三十年」――10
鼎談「隣近所と日本人」――58
『コミュニティ』『高年齢を生きる』特集テーマ一覧――72
●連載
教育しろん⑨「お母さんと塾教育」村田　博――76
シルバー通信「〝人並み〟に生きる」金森トシエ――78
家族の風景⑬「家族の範囲」牧野カツコ――80
中高年のライフスタイル㉒「子供ではない、年寄りなんだ」服部万里子――82
コミュニティ入門④「きまったコース」四方　洋――84
町村だより――86　読者の声――89　ブックレビュー――90

●巻頭エッセー

「競争」から「共生」へ

西尾信一――にしお・しんいち／第一生命代表取締役会長・地域社会研究所理事長

地域社会研究所ができてほぼ三十年、『コミュニティ』誌も一〇〇号になりました。その「刊行のことば」の冒頭に、矢野一郎初代理事長は「人間は、ひとりでは生きてゆかれない」と記しておられます。そのことが今、大きくクローズアップされてきたと思います。というのは、日本の企業は今、その理念や行動を厳しく問われるようになったからです。

これまで日本の企業は、自由競争の名のもとに猛烈な競争をやってきました。各企業がシェア拡大や業界での順位争いを一生懸命にやって、その競争が全体として日本の経済を復興させることにつながったわけではありますが、とうとう行き着くところまできて、経済摩擦が起こってきました。たとえば去年の秋、経団連の第一次訪欧ミッションにたいして、ヨーロッパ側では「今の日本の企業のやり方をされたのではヨーロッパの企業は窒息する」と表現したそうです。

また、例えば環境問題です。地球の環境問題は、一企業だけで対処できるものではありません。一国家だけでも処理できない問題です。先ごろブラジルで地球環境会議が行われたように、各国が協調して全地球的に解決していかなくてはなりません。企業もまた、お互いに提携し、協調していかなければならない時代になったのです。そして、従業員の生活の向上、地域社会への貢献、その他さまざまなことを配慮してグローバルにものを考えていかなくてはならない。少なくとも、自分だけがよければいいというのではなく、バランスのとれた経営をしなければならない時代になりました。そのことから「共生」ということが言われるようになりました。文字通り、共に生きるという意味です。

ところが、具体的にどうするかとなると、暗礁に乗り上げてしまうのが現状です。外国企業との競争を避けるといっても、管理貿易をやるという意味ではありません。競争を止めてしまうわけではなく、競争しながら、お互いに生きていけるように考えましょうということですから、難しい問題です。労働時間の短縮いわゆる「時短」についても、賃金や株主配当等、個々の問題についても、意見が分かれるところです。

ですから、「共生」といっても、まだあいまいな概念なのです。一つひとつ具体的な課題を取り上げると、そう簡単に解決できない問題ばかりだと私は思います。しかし、「共生」という方向に進むべきだということは、環境問題や経済摩擦を通して、いよいよ、はっきりしてきました。現在は、その転換期にあるために、いろいろなことが、まだはっきりしていないのです。新しいものの考え方、新しい企業行動の理念が、まだ確立されていないのです。

従来、日本では同質化競争が行われすぎるということがあります。新製品をどこかが出すと、同

じようなものをすぐに開発して猛烈に値段を下げながら競争する。そして、大きいことはいいことだということで、各企業が必死にシェアの拡大をめざしてきました。それ一本槍、これまでは、そうした方向で企業努力をするという考えしかなかったのです。こうしたことが反省されるようになりました。たとえば、どこの国においても自社製品のシェアを二〇％以内に押さえるという方針をとっているヨーロッパの企業があります。二〇％を超えると、それ以上は販売しないという理念で自己規制しているわけです。そういう自己規制がいいかどうかは別として、同質化して過当な競争をするだけが企業のありかたではないということは言えます。むしろ、各社が自分の創造力で開発した独自製品をもつ方向に進めば、それぞれの拠り所というものが出てきます。

これまでの日本は、あまりにもそういうことが少なすぎました。自分中心に考えて、いいものを安く消費者に提供して何が悪いといった考え方だけでは、もはや成り立ちません。企業というものは、社会一般の多くの企業、地域社会、その他いろいろなものとの関係で成り立っているのですから、そこにフィランスロピィー（企業の社会貢献活動）の必要性も出てきます。地域社会のおかげになっている以上、その地域社会に貢献していくのは当然だという考えをもたなくてはならないのです。

こうしたことが「共生」につながる具体的な方法として出てきていることです。そしてそれは結局、矢野前理事長が『コミュニティ』誌の刊行の言葉の冒頭で言っておられる「人間は、ひとりでは生きてゆかれない」ということに戻っていくのです。人も企業も、ひとりで生きているわけではない。地域社会研究所設立から約三十年たって、この思想がようやく普及し、これからの日本の方向を定めるものになったと言えるのではないでしょうか。

◉特集

日本のコミュニティ

【座談会】

コミュニティの三十年

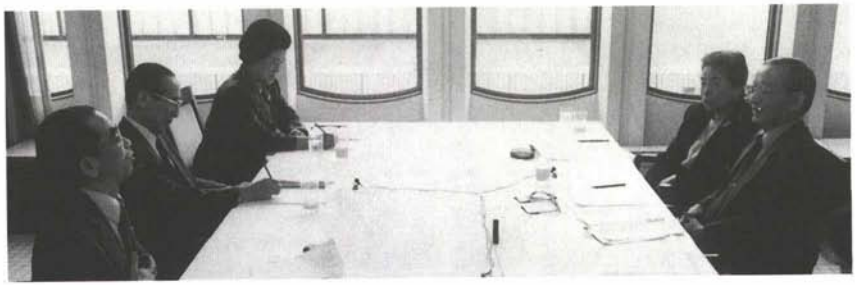
【司　会】並木正吉…なみき・まさよし／食料・農業政策研究センター理事長・地域社会研究所理事
【出席者】湯沢雍彦…ゆざわ・やすひこ／お茶の水女子大学教授・地域社会研究所理事
青井和夫…あおい・かずお／流通経済大学教授・地域社会研究所理事
三枝佐枝子…さいぐさ・さえこ／商品科学研究所所長・地域社会研究所評議員
中根千枝…なかね・ちえ／東京大学名誉教授・地域社会研究所理事
（敬称略・発言順）

この三十年をふり返ってみると、「日本のコミュニティ」は大きく変わった。具体的にはどのようにかわったのだろう。時代の変化とともに、さまざまな問題をかかえるなかで、いま、コミュニティの再生が求められている。

大きく変わった日本の社会

並木　本日は「コミュニティの三十年」というテーマの座談会ということで集まっていただきました。コミュニティをめぐって一番大事なことは何か、あるいは一番ご興味のある問題は何か。ご出席の先生方に、それぞれ、ひとつないしふたつの問題点をだしていただき、それを中心に話を展開していきたいと思います。また、戦後の社会の移り変わりや日本の国際化など、コミュニティをめぐる問題には日本的な特徴もあると思われますので、それにも光を当てていただければありがたい。日本的な特徴のなかには、かつては日本の後進性を表すもの、つまり非常に遅れている点だとされていたことが、現在では意外に優れた特徴だというように評価が全く変わってしまったものもあるように思われます。そういったことを含めて、ご自由にお話しいただければと思っております。

その前に、この三十年間の経済的な変化を少したどってみようと思います。昭和三十八年（一九六三年）の一人当たりの国民所得を調べますと、ちょうど二〇万円。それが平成二年（一九九〇年）になりますと、一人当たり二七八万円と十四倍くらいに増えています。これをドルに換算しますと、昭和三十八年は五五〇ドル、平成二年は二万ドル、三十八倍にもなるんです。それにしたがって、就業構造もすっかり変わってきました。三十年前は、働いている人のなかで雇われている人はせいぜい五割くらいでしたが、いまや八割になりました。特に働きに出る婦人が多くなったことで、非常に顕著に変わったように思われます。それから第一次産業の比率も、三〇%だったのが六%になりました。そして五%だった六十五歳以上の高齢者の比率は、現在では一〇%を超しております。



そのほか、大学への進学率が二〇%弱から四〇%近くに上がっておりまして、これは、女性のほうが二ポイントくらい高くなっています。念のために、エンゲル係数を申しておきますと、三六%から二五%くらいに下がっています。

このような大きな変化にともなって、コミュニティをめぐる諸問題も、いろいろに変わってきたのではないかと思います。では、湯沢先生から、家族の問題についてお話しください。

並木正吉氏

民法と家族の変化

湯沢　民法が新しくなった昭和二十年代からの変化を追ってみると、わかりやすいかと思います。新民法は、昭和二十三年（一九四八年）の一月一日に施行されました。が、これはどうも、当時の

日本の家族関係にはほとんど合わなかったように感じられます。その頃はまだ、日本の家庭に旧態依然たるものが残っていたんですね。特に地方にはなかなか新民法が定着しなかった。たとえば、法律関係者の間では「新民法は仙台まで」という言葉がありました。新民法は仙台までは何とか通用するが、そこから北には及ばないという意味です。この言葉は、民法をお作りになった方の一人で中川善之助先生が東北大学勤務だったので「仙台まで」といわれたんでしょうが、実際はもっと浸透が遅かったようです。というのも、家庭裁判所に勤めている友人に聞いてみましたら、「福島でも通じない」「前橋でもだめだった」といっていました。新民法を施行したといっても、「男女平等など反対だ」とか「単独相続がいいに決っている」といった古い価値観が、まだまだ根強く残っていた頃でしたので、調停委員なども「きょうは、昔の『六法全書』を持っていきましょうよ」とよく話しあっていたということです。

湯沢雍彦氏

ですから、民法が変わっても、家族のありかたが急には動きませんでしたが、ようやく昭和三十五年から変わってきました。国勢調査を見ますと、一世帯当たりの平均人員が五・〇人からまるっきり動かなかったのが、昭和三十五年からやっと〇・五人ずつ下がってきたのです。都市への移動が多くなったということもひとつの理由ですが、最も大きな理由は、計画出産が成功し、子供の数が五人からたちまちふたりに下がってきたということです。

その後、日本の伝統的な家族にもさすがに動揺が始まりました。私は昭和四十年が非常に大きな境目だったという気がします。その表れのひとつが、結婚です。

「あなたの結婚は、お見合いでしたか、恋愛でしたか」という質問に対して、四十年を境に「恋愛」という人が増え出しています。客観性がどれだけあるかは疑問ですが、ともかく、〝恋愛結婚〟の人が増えてきました。

それから、離婚したとき、父母のどちらが子どもを引き取るかという問題。親権者を決定しなければ離婚できないので、人口動態統計に結果がはっきり出ています。それを見ると、これも四十年を境に、きれいに逆転しています。それまでは、子供は嫁いだ先の家のもの、女は身ひとつで帰るということが多かったのですが、四十年以降、妻が子どもを引き取る風潮があらわれてきました。また、それまでの三十年代は、「子どもがいなかったら養子をもらってでも家をつがせるのが大切だ」という意識が強かったのですが、これも四十年以降、「そんなことは必要ないじゃないか」という意識の人が圧倒的に多くなりました。姑よりも嫁のほうが強くなったという「嫁と姑の立場の逆転」も、昭和四十年ごろに始まったように思います。

昭和三十八年に出された岩手県の農婦の作文集の巻頭に「嫁と姑」というおもしろい文章があり

世帯人員の推移

昭和三〇年……四・九六人
昭和三五年……四・五四人
昭和四〇年……四・〇四人
昭和四五年……三・六八人
昭和五〇年……三・四五人
昭和五五年……三・三三人
昭和六〇年……三・二三人
＊総務庁統計局「国勢調査」より

ます。「今は、嫁が姑で、姑が嫁さ。なんだって時代の変わり目にあった私たちは運がわるいんでしょう」というものです。「嫁のとき大変苦労したから、姑になったら威張れるだろうと思ったのに、自分が姑になったらまた嫁に威張られた」という感想文もありまして、これも家族の中の逆転現象をよく象徴しているのではないかと思います。

そして昭和五十年代には、世の奥様方は家の奥に引っ込んでいるはずの「奥様」から、外ばかり出歩いている「外様」に変わった。今でも「奥様」と呼びますが、実際は、ほとんど家にいないというのが現状ではないでしょうか。このことは、私が昨年まで校長をしておりました高等学校で、長年教頭をやっておられた先生がよくこぼしておりました。たとえば、生徒が体育の時間にけがをした場合など、お母さん方に連絡を取るために電話をかけます。十五年前ならお母さん方がいたけれど、今はほとんどいない。昼間電話をかけても連絡がとれないというんです。五十年代から、そういったことが起こってきました。

それから、『コミュニティ』第九七号の「現代結婚考」というテーマの座談会の中で、現代家族問題研究所の円より子さんが、昭和六十年代には「結婚が必需品から嗜好品に変わった」とおっしゃっていました。以前は男性にとっても女性にとっても結婚は暮しにかかせない必需品であったけれど、今はしてもしなくてもいい嗜好品になって、気楽な選択に変わってきたのではないかというわけです。そして今のところ、そのあおりをくって結婚難に陥っているのは、男のほうではないかというんですね。

そうして、ここ四、五年、民法はもう今の日本の家族と合わなくなってきています。民法が施行された当初の昭和二十年代は、日本の家族の現状よりも民法のほうが先走っていた。四十年代にな

ってやっと五分五分に並び、最近では、今の民法は古臭いという声のほうが多くなってきました。特に古臭いとされているものは、離婚原因の決め方や夫婦財産制のこと、そして最近めだってきたのは夫婦別姓問題です。夫婦だからといって同じ名字でなくてもいいじゃないかと考える人が出てきました。

なにしろ家族というものは常に姿が移り変わりますので、民法と家族がぴったり合うことはなかなかないものだと改めて感じさせられました。大ざっぱですが、こういったことが、ここ三十年における家族の特徴的な変化ではないかと思われます。

「アメリカ」と「アジア」の間で

並木　国際的に比較してみると、日本の家族の変化、特色はどんなことがあるでしょうか。

湯沢　いろいろありますね。法律婚をとりたがる男女が非常に多いことも、そのひとつです。最近の若い男女のほとんどが、届出をして法律の枠に入る「正式な結婚」を望んでいます。先進国の中で日本ほど法律婚の枠に入りたがる国はない。アメリカやヨーロッパ、ことに北欧とは全く正反対で、好きになった男女が一緒になって暮すのにどうして法律が必要かといいます。教会に行く人も少なくなっています。神父さんや牧師さんのお説教を日ごろ聞いたこともないのに、結婚するからといって聞く必要がどこにあるのかというのが彼らの一般的な考えで、北欧では、おそらく三組に二組はどちらもしません。法律婚をしないのはロンドンやパリでは当たり前のことで、逆に日本の人が皆婚姻登録すると聞くと、彼らはびっくりしてしまう。これは結婚せずに子どもを生む割合

を見てもわかります。日本の場合、およそ九九%の子どもが結婚している親から生まれてきます。非嫡出子は一%だけ。それに比べて、ヨーロッパの場合は、はっきりわかっている限りでも、デンマーク、スウェーデンは五〇%なんです。

並木　いわゆる未婚の母が多いわけですね。

湯沢　同居してますから、未婚というより「登録しない結婚」というほうがいいように思います。婚姻登録せずに一緒に住み、ごく普通に子どもを産むわけです。こういった人はアメリカでは二〇%といわれています。これはアジア系の人の登録率が高いということがあるので、白人に限りますとそれ以上。そして、西ヨーロッパ諸国がだいたい二五%ぐらいです。

ところが日本では、そういったことに非常に拒否的です。たとえば「未婚で子どもを産むことをどう思うか」といった意識調査を行った場合、ほかの国では何十%かの人が「そういう生き方もいいでしょう」と理解を示す。が、日本では一%にも満ちません。そういった日本人の意識は、非常にかたくなな態度としてとることもできますが、逆に非常に遵法的ともいえるでしょう。

日本では離婚率も意外に低いんです。非行率も横ばいないし減少。新聞や雑誌、テレビなどの報道から受ける印象とは逆に、親殺しなども減る一方というのが実情です。この点も、ほかの国には見られない注目すべき問題だと思います。

一般の人は「日本の家族は荒廃している」「衰退しているんじゃないだろうか」という認識がとても強いようですが、これは戦後四十数年、日本のマスコミがとってきた悲観主義的、不安神経症的な態度の影響といっても過言ではないでしょう。離婚や親子関係の分裂といった問題もかなり騒がれていますが、一部が極大化されて報道されているにすぎません。実際には、それほどではない。

しかし、だからといって、日本の夫婦や親子はまとまりがよくて問題がないかというと、またそういうわけでもないというのが私の感想です。たとえばアメリカやヨーロッパの夫婦は、離婚になるような関係でない場合、それなりに温みがあり、まとまりがある。ところが、日本の夫婦の場合、ほとんどの夫婦は離婚には至らないけれど、なんとなく温みが少ない。

レジャーに関する統計で、父親も含めた家族旅行をやる度合いを調べたものがあるんですが、日本は本当に少ないですね。父親が加わった家族旅行がドイツの十分の一以下もない。これも非常に問題だと思いますね。日本の家族では、夫婦のつながりと親子のつながりとどちらが大切なのか。これが、はっきりしない。ことに女性には、舅や姑だけでなく自分の親とさえ暮したくないという人もわりあい多い。核家族を希望するわけです。それでは「あなたの子どもさんが大きくなって結婚するときも、核家族の形をとるんですね」と聞きますと、そうではない。さらに聞いてみますと、「子どもとは、できたら同居したい」という。はなはだ曖昧模糊としています。

青井　勝手ですね。

湯沢　ええ。また、老人が「子どもとの同居」を希望する割合は六〇%。他の先進諸国ではそんなに高い割合ではありません。これでも低くなってきたのですが、まだ中途半端に思えます。夫婦家族制、直系家族制、そのどちらがいいのかはっきりしない。おそらく両方のいいところをとりたいのでしょう。

一言でいえば、「顔はアメリカ、心はアジア」というところですね。多くの日本人が、顔はアメリカやヨーロッパのほうばかり向いていて、彼らの生き方のまねをしたがっている。ところが、実際の心情は、韓国や中国により近い。親に縛られたり、親を大事にしたりする慣習のなかにいながら、

上面だけは核家族のアメリカ型がいいという憧れをもっている。そういった分裂を、多くの日本人がもっている。これが、特色ではないでしょうか。

並木　戦後、アメリカ軍に占領されたころ、アメリカ的な生活を理想とするのが一般的な風潮でした。耐久消費材などの物づくりの面ではアメリカのまねをしてきたけれど、考え方・生き方などの面では、ちっともまねしなかったという印象がある。それと符節が合うお話でおもしろかったと思います。今の問題について三枝先生はいかがでしょうか。女性の話も出ておりましたが……。

強まってきた「実家」主義

三枝　おおむねは、湯沢雍彦先生のおっしゃったとおりの経緯であると思います。私は『読売新

三枝佐枝子氏

聞』その他の「人生案内」欄の回答をしていますが、その相談によせられるケースでは最近は実家主義というか、実家症候群というような風潮が若い人に非常に強くなってきたのを感じます。実家のほうにいつまでも属している。婚家先ではなく、実家のほうのコミュニティとばかり付きあっているケースが非常に多いのです。そして、それがいろいろなトラブルになっています。

中根千枝氏

中根　それは夫も妻も?

三枝　ええ。でも、ことにお嫁さんのほうに、その傾向が強いようです。

青井　ということは、夫婦別姓という発想も独立意識から生まれたものとは限りませんね。実家の姓のままでいたいという気持ちが強いのかもしれない。

三枝　そうかもしれません。

並木　出産のとき、以前は必ず実家へ帰って産みましたが、この頃はどうなっておりますか。

三枝　病院での出産がほとんどですが、退院すれば実家で静養します。やはり実家との結びつきはかなり強い。

年をとってきた親の面倒をみる必要にせまられたとき、実家と婚家とどちらの親の面倒をみるかという問題に、それが一番顕著にあらわれるようです。子どもが少ないですから、結局のところ、両方の親の面倒をみなくてはならないのですけれど、本当は自分の実家のほうをみたい。でも、結婚相手の面倒もみなくてはいけない。こういった悩みが非常に多くなってきました。

並木　うちの長男の嫁の実家は富山なんです。その実家のご両親の面倒をみるとすれば、旦那と分かれて向こうにいかなければなりませんね。

三枝　別れていく人も出てくるかもしれません。

並木　そうですか。ところで、通婚圏というのは、最近はどうなっているんでしょう。親の面倒

青井和夫氏

をみるということで、通婚圏が狭くなってきているんでしょうか。

中根　都会で職場結婚する場合などそうはいかないでしょうね。

湯沢　いまは恋愛結婚が多いですけれど、その過半は職場結婚ですね。地方の場合は同じ職場でなくとも、地元で働いている人同士の結婚であれば、親も近くにいます。ところが、東京や大阪で結婚しますと、実家がうんと離れてしまうケースが多いですね。

並木　それぞれの実家が北海道と鹿児島という夫婦もいます。

青井　それで家族関係がうまくいくとしたら、たいしたものですね。

人間関係を法律に頼る日本社会

並木　先ほどの湯沢先生のお話について、中根先生は何か。

中根　一番大きな変化として指摘できるのは「夫婦別姓」という考え方が出てきたことだと思います。これは日本の婚姻史上初めてではないでしょうか。だいたい日本には江戸時代まで一般の者には姓がありませんでした。

しかし、結婚というのは一方が他方の「家に入る」というように考えられていました。だから、夫婦は結婚したら、どちらも同じ箱に入った単位であるわけです。それで民法で夫婦同姓という形ができたと思うんです。中国や韓国では夫婦別姓ですし、ヨーロッパでもアメリカでも別姓にすることができる。別姓にできないのは日本だけなんです。そして、同じ箱に入っているという考え方にしたって、ずっと夫婦同姓の形をとってきたわけで、夫婦別姓というのは日本になかった考えで

すね。

そういった意味でこの別姓問題を主張する人たちが、たとえ多くなくとも出てきたということが大きな変化であるように思えます。

この別姓問題と、さきほどの実家主義とは、また別のものだと思いますね。なぜなら、実家との結びつきが強いという事実は、最近に突然あらわれたものではないからです。歴史的にも妻問い婚のような形がありました。婚家が嫌だとすぐ実家に帰る地方もずいぶんありましたからね。ですから、婚家よりも実家とのつながりが強いという関係は、古くて新しい問題です。

並木　日本では法律婚が多いというお話については、どう思われますか。

中根　それも昔からある考え方だと思いますね。同じ箱に入ってお互いに安定を与えあう。この安定性を求めるという考え方は、日本人に非常に強い。それは逆に、個人が弱いということにもなります。個人が強ければ、そんな箱は必要ないし、法律にだって依存しなくていい。他の国の社会と比べてまだ個人が弱いというところから、日本人はきわだって安定性を求める傾向があるのではないでしょうか。また、終身雇用が発達したのも、安定性を求める日本人の考え方からきていると思います。

そして友人や親類のネットワークの結びつきが、日本人はヨーロッパや中国、インド、その他のアジア諸社会などに比べて弱い。今あげたような他の社会では血縁関係がすごく強いから、法律に頼らなくても、血縁の人たちが認めていれば、それで社会に十分通用するんです。法的な結婚ではなく同棲であっても、たとえばヨーロッパの場合、親しい友人はちゃんと認めてくれ、それなりに振る舞ってくれる。ですから、無登録の結婚が多くても、わりに社会が安定しています。日本では

同棲関係を社会的に正当に取り扱ってくれそうにない。友人だって、どのような態度をとるかわからない。血縁関係のある人にだって、法的に結婚していなければ具合がわるい。その血縁関係がまた、日本ではせいぜい親子、きょうだいまで。ほかの国の社会ではもっと広い血縁関係の人たちにも支えてもらえるんですけどね。

そういうように、日本では血縁関係もフレンドシップも結びつきが弱い。頼れない。そして、残っているのが「職場の組織」といえるかもしれません。職場つまり「会社」などはある意味では一番依存できる、安定性を与えている機関といえましょう。しかし、同棲などということになると、一層不都合でしょう。それで、頼れるのはやはり法律ということになってくるんじゃないでしょうか、日本の社会では。

並木　中国の社会学者で、家族の結びつきについて、おもしろい解釈をした方がいらっしゃいますね。

中根　アメリカにいる中国人のフランシス・シュウでしょう。

並木　あの人の解釈では、家族の中の人間関係で、どの対の結びつきが一番強いかによって社会が決まってくるという。日本の場合は、父と長男という対が一番強かったということでしたね。さきほど、ヨーロッパの場合は夫婦の結びつきが一番強いという湯沢先生のお話がありましたが、それが日本では「親と跡取り」の結びつきに相当するように思えます。

しかし、核家族のような形で夫婦が中心になってきたのは、ややヨーロッパ的になってきているという面があるんでしょうかね。

青井　まだ中途半端ですね。考えは、直系家族的なものから夫婦家族へ向かっているんだけれど

も、現実的にはまだそこまでいっていない。徹底していないんですね。なにしろ、ほかの東洋の社会ほど完全に親子・血縁の原理がしっかりしておらず、また、西洋ほど夫婦関係が強いわけでもないですから、結局、中途半端なんです。だから、どうしていいか、わからないんじゃないでしょうか。直系家族的な制度は崩れたけれど、どういった家族関係をとればいいのかわからない。どこにも正当性がないという感じすらします。

親になったときが一番うれしい日本人

湯沢　ある集会で、「結婚して妻または夫になったときは、うれしかったでしょう?」と聞いてみたことがあります。よっぽどへそ曲りでないかぎり男性も女性もうれしいと思っています。「子どもが生まれて親になったときはどうですか?」と聞くと、これもまた、うれしいと答えるのが普通です。そこで、「結婚をしたときと親になったときでは、どちらがより満足感や充実感が大きかったですか」と聞くと、どんな答えが返ってきたと思いますか。実は九〇パーセント以上の人の手が「親になったとき」のほうに挙がったんです。ある婦人会議にいったときなどは、「結婚をしたとき」のほうに手を挙げた人は千人ぐらいのうち、たった三人だけでした。これは極端な例ですが、東京でも最近になってやっと、「結婚をしたとき」のほうに挙手する人が一五パーセントくらいに増えてきた。東京の若い人でも大半は「親になったとき」のほうに満足を感じるんですね。

こうしたことを男性に質問するチャンスはあまりなかったのですが、ある年、社会保険事務所の研修会に呼ばれて伺ったとき、五十年配の男性ばかりが百人いらしたので、同じようなことを聞い

てみました。そうしたら、百人が百人とも「父親になったとき」のほうに手を挙げたんです。「結婚したときは特になんとも思いませんよ」という声も多かったですね。要するに、日本の夫婦の場合、子どもが欲しくて結婚するんじゃないかという感じがします。

中根　日本人の夫婦関係は弱いといいますが、それを強くするためには、配偶者同士、二人が対等でないといけませんね。そうでないと、どちらかが主で、いっぽうが従属する形になってしまって従属側は立場が弱くなってしまいます。

ところが日本人は、ふたつのものが対等に立つという関係を保つのが非常に不得手です。親子ならはっきりした上下関係になるからいいんですけど、夫婦だと、そうならない。それにアメリカや西洋のような夫婦関係が、はたして日本でそれほど重要な関係なのかどうか。純日本的な考え方の中では、夫婦とはいったいどういう存在なのか。昔からよく「亭主はまめで留守がいい」といいますね。これは二人の関係が対等であるというよりは、妻がベースキャンプにいて、夫が山登りをしているような関係だと私は思うんです。だから、少し帰らないことがあっても、それほど心配しない。アメリカの奥さんは非常に心配なさるようですけど、日本の場合は、いつかはベースキャンプに戻ってくる、そういったゆるやかなつながりのなかで成り立っているのが、日本の夫婦関係の特色じゃないかしら。

湯沢　私の小学校時代の女友だちから、こんな話を聞きました。彼女は周りの者がうらやむような国鉄のエリートと結婚したんです。しかし、それがために支局長だの総局長だのと昇進するたびに転勤に次ぐ転勤。子どもがいたので、夫には単身赴任をしてもらった。そうして五十三、四歳になって、東京にある子会社へ出向させられ、転勤もなくなって、毎日二人が鼻を突き合わせる生活

が初めて始まった。そうしたら、いやなことが鼻についてしようがないというわけです。結婚して二十何年たって「こんないやな男だとは思わなかった。離婚したい」というんですよ。男に何か悪いところがあるのかときいたら、全然ないというんですがね。

中根　日本人だけじゃなく、アメリカ人の夫婦だって、あんまり一緒にいると鼻につくんじゃないかしら。そのうえ、アメリカの夫婦は、いつも一緒にいなきゃいけない。だから離婚が多いんじゃないかしら。

並木　逆に日本は適当に離れているから、離婚が少ない。

中根　そうです。ほかのことで忙しかったりしてね。

青井　そうなると、うちのように子どもがいない場合には、毎日顔を突き合わせて、よく我慢してきたものだと思いますね。

中根　それこそふたりが対等に並んでいらっしゃるんじゃないかしら。

より重要になった嫁と姑の関係

並木　中根先生、婦人問題の関連でどうでしょう。たとえば、嫁と姑の問題は永遠の課題みたいに大きいでしょう。

中根　その問題がいちばんすごいのはやっぱり韓国と日本なんですよね。なぜかといいますと、姑一に対して嫁一だからなんです。中国とかインドですと、大家族だから、一対五とか六になっている。家に残る男の子はみな一生、生家の正式成員ですから、一家に嫁が五、六人いるわけですよ。

そうすると、嫁、姑の関係がそんなに緊張しないんですね。

並木　もしインドでも嫁がひとりなら、やっぱり大変ですか。

中根　ええ。一対一になると、とても大変なことになるんです。韓国や日本は制度的に一対一の関係で、特に韓国なんかは、日本よりひどい。日本では近ごろはお嫁さんが威張ったりしていますが、韓国ではそういったとこはまだないですからね。

並木　中国はどうですか。姑と嫁は一対数人ですか。

中根　そうです。だから、嫁姑関係はずっと緩和されるんです。大家族でお嫁さんが五、六人いると、姑だってそんなむちゃなことはできませんからね。それに財産もきょうだいで均分相続ですから、誰が優先されるといったこともない。

それに日本の場合、けんかを閉ざされた家の中だけでやるからいけないんですよ。インドや中国だと、嫁と姑が家の外に出てけんかをするんです。路地などで大声でけんかをやると、隣近所の大勢の人が見にくる。そして、嫁さんのほうがいいとか、姑の気持ちもわかるとか、みんなで批評する。だから明るい、じめじめしていない。だけど、日本では昔から、近所の人に「うちの嫁はひどい」といいふらすことはあっても、閉ざされた家の中でけんかをしている。一対一の関係であるうえに、閉ざされたところでけんかをするから大変なんです。

並木　なるほどね。

湯沢　最近の若い夫婦に聞いてみましても、「二分の一は、相手の親と結婚するようなものですよ」ということですね。だから、どうしたらうまくいくかは、とても重要です。子どもが少なくなったことによって、相手の親との関わりは、かえって強まっているのかもしれない。

長幼の序と夫婦の役割分担

湯沢　「長幼の序」という言葉が儒教にありますが、これに従うと、どんなときでもとにかく年長のものが偉いという考えのもとに秩序をとることになる。その考えが強い韓国では嫁さんは姑に何が何でも服従しなければいけない。これがあるから、嫁と姑の関係が、よけいに大変なんだと思うんです。ひとりの女性同士として対等に口をきいてもいいというようにすれば、うまくいくのかもしれないと思うんですが、なかなかそうはいかないようですね。

この長幼の序ということで思うのは、いまの学生は入学が一年違うだけでも「先輩」と呼ぶでしょう。また、先輩は後輩にたいして威張れる。こんな国はちょっとめずらしいんじゃないですか。

並木　本当に「先輩、先輩」といいますね。

中根　若い子たちは本当に、先輩という言葉が好きですね。

青井　女の子でもね。

中根　そうそう。デパートなんかでも、従業員がいってますね。

並木　中国の儒教には「五倫」という考え方がありますね。君子に仕える「義」、親子の間は「親」、夫婦は「別」、そして長幼序ありの「序」、朋友つまり友人との間は「信」ですね。『教育勅語』にも「朋友相信じ」と載っている。そして「長幼序あり」という秩序は、儒教の中では非常にはっきりしているんでしょうね。

ところが、夫婦は別というのはどういう意味でしょう。姓を別にするという意味でもないと思う

けども……。

中根　中国の場合、同じ父家血縁につながらない者は姓は別です。しかし墓は夫婦ごとです。

並木　儒教では、夫婦の人倫、つまり道は別といいますね。役割分担が別だという意味ですかね。

青井　そうです。お互いが助け合わなきゃいけないということでしょうね。

中根　中国でもインドでも。夫婦も役割分担がはっきりしているんですね。だけど、日本はかかあ天下とか亭主関白で、人の領分を強いほうが浸食できる。それでまた夫婦関係が難しくなってしまう。

「地域」から自由になった女性たち

並木　三枝先生、婦人にとっての戦後の推移についてお話しください。

三枝　戦争が終わって新しい時代になったとき、「今までのようなコミュニティはいやだ」ということを、おそらくほとんどの女性が非常に強く感じていただろうと思います。というのは、戦争中には隣組などもありましたし、プライベートなことにまでずけずけ入ってくる付きあいが、非常に多かったでしょう。そういった付きあいは、助けあうというよりも、お互いが干渉しあうという傾向があったように思います。そのうえ国防婦人会・愛国婦人会などがあって、とにかく束縛されておりましたから、むしろ「あまり地域につながらない生き方がしたい」ということを、ことに都市の女性は戦後の女性解放と同時に感じたのではないかと思うのです、下町のようにコミュニティが続いている地域は別として、一般の人は地域とかかわりなく、むしろ、志を同じにする人たちが集

まって、仲間をつくりました。ことに女性の場合、戦後間もなく起こった消費者活動がよい例です。「火がつかないマッチを買わされた」とか「牛乳をもっと安く買いたい」とか「お豆腐をみんなに配りたい」というところから、同じ志や目的をもった仲間が集まる。これが一般的なコミュニティとして、戦後一番早く始まったような気がします。特に現在は「一緒に勉強をしたい」とか「同じ趣味の仲間をつくりたい」といった、地域が同じでなくとも、同じ考えをもっている者同士が集まって何かをしたいという意識をもった人の集まりが非常に多いと思います。ですから、地域が大きな意味をもっていた昔にくらべ、少なくとも都会では、地域があまり意味をもたなくなったのではないかと私は思います。

それから、大都会には集合住宅がずいぶんできていますね。しかし、集合住宅で同じ建物の中に住んでいるからといって、コミュニティをつくってうまくやっているかというと、どうもそうではないように思います。私どもで調査した結果では集合住宅、ことに超高層住宅に住む子どもたちは同じ住宅の子どもとあまり遊ばないようなんです。住宅の中にあるコミュニティルームが活用されていないし、奥さんたちも同じ住宅に住む方とそれほど親しくしない。人が密集しているだけでは、近隣の人との交際ができないものなんでしょうか。そういったところに勉強する場所とか、子どもたちを一緒に遊ばせる場所をつくるのが、地域のコミュニティにとって望ましいことなのではないかと思うんですが、それがなかなか難しいのですね。

また、仕事をもつ女性もずいぶん多くなりましたので、子どもを保育所にあずけるとか、企業の中の保育園に連れていくケースが増えてくる。そこでも地域との連携が本当は非常に大切なんです。たとえば保育所はたいてい六時までですから、お母さんの帰りが遅くなるときは、保育所が終わっ

たあと、もう一度ほかの場所にあずけなければならない。いわゆる二重保育をしなくてはならないのです。そこで、保育所が終わったあと、あずかったり面倒を見てくれる人、また、子どもが学校から帰ってきたときにちょっと遊ばせてくれるところが必要だと思います。

地方にはそういった協力体制がありますけれども、大都会の場合、十分ではない。女の人は、よほど実家がそばにでもないかぎり、特にフルタイムの仕事はできないというのが問題です。それをこれから、地域の問題として考えていくことができればいいと思います。

話は別になりますが、私は山梨の婦人会館の館長を七年間やっておりまして、山梨にはまだかなりコミュニティが残っていると感じています。詳しく調べたわけではございませんが、山梨の場合は「無尽」というのがあって、グループ作りをしてお金を積み立てる。お金が当たると仲間で旅行へいったりしています。それが非常に盛んで、ひとりで何十も入っているような人もいます。選挙などでも、それがひとつの母体になるらしいんです。そこで、女の人でもわりあい自由に夫と別に出かけて飲み食いをすることがある。そういうグループづくりが今でも続いています。

また別の形でも、地域との連携が非常に大切にされています。冠婚葬祭のときなど、隣組みたいなものがありまして、その仲間でいまでも熱心に助けあっております。たとえばあるとき、私が婦人会館へまいりましたとき、大切な催しがあるのに副館長が会館に来ないんです。「副館長は、どうしたんですか」と尋ねますと、「隣組の人が死んだから、きょうはずうっと手伝っている」というわけです。「こちらにも大切な仕事があるので、ちょっとだけでも来てもらえませんか」といったら、「それは絶対だめです」と断られました。そのくらい結びつきが強いんです。それは山梨の特色なのか、あるいは地方ではどこでもそうなのかわかりませんが、とにかく、地域の結びつきが非常に

強い。ですから、婦人活動も、わりあい地域に根ざしております。リサイクル運動や川をきれいにする運動、花を植えて地域を美しくする運動などが、婦人会のみなさんの協力で、盛んに行われています。

並木　たしか経企庁の住みやすさの調査で、山梨が一番になりましたね。

三枝　一番といっても、それがどういう意味なのかよくわからないですけど。

並木　要するに所得水準だけじゃなくて、幾つかの計量的な指標を集めたものでしょう。地価がわりに安いとか、住宅が比較的広いとか、通勤時間が比較的短いとかということ。そのうえ山梨県では、地域コミュニティもまだ健在ですね。

三枝　健在ではありますね。それが必ずしもいいほうに向かっているかどうかは別として。

並木　そこが問題ですね。

『コミュニティ』誌にみる三十年

青井　ところで、この『コミュニティ』誌は第一〇〇号を迎え、発刊から三十年近くになるわけですが、これまで二回、ほぼ十年ごとに振り返ってみたことがありました。『コミュニティ十年』（一九七五年刊）と『コミュニティ二十周年記念論文集』（一九八三年刊）です。どちらにも、非常におもしろい話が載っております。

まず、『コミュニティ十年』のほうには、「日本の社会とイギリスの社会について」という座談会が載っておりますが、そこでドーア(注)さんが、非常におもしろい話をされております。

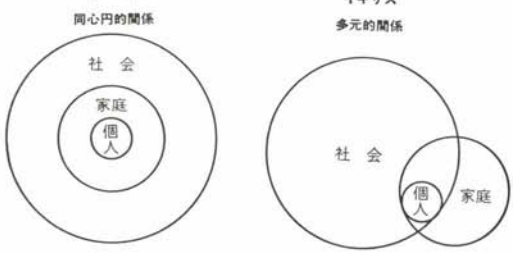
(注)Ronald P. Dore
ロンドン大学日欧産業比較研究センター所長。一九二五年英国ボーマンスに生れる。ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院を卒業し、ロンドン大学スクール・オブ・エコノミクス社会学教授、プリンストン高等研究所客員教授、技術変化研究センター副所長を経て、現在、ロンドン大学インペリアル・カレッジの日欧産業比較センター所長。社会学者、日本研究者として高名である。
主な著書…『江戸時代の教育』『都市の日本人』『日本の農地改革』『学歴社会』『イギリスの工場・日本の工場』など。

「日本人では、個人というものが家族のなかへ埋没している。そして次に家族が、昔だったら村から藩、現代では地域社会から国民社会へと同心円的に埋没している」と。

イギリスは違うというんです。イギリスでは、個人は家族にさえ埋没していない。会社にも地域社会にも埋没していない。むしろ、一番弱いのが地域社会との結びつきである。しいてどこに入っているかといえば、それは、国民社会というべきであって、地域社会というのは人間をどっぷり埋没させるだけの役割もないし、そういう集団でもない。イギリスにおいては、個人は家族に、地域社会に、会社に、その一部分をあずけてはいるが、どこにも完全には埋没してないといっています。

その当時は、なるほどとただ感心して聞いていたのですが、いま思いますと、イギリスでは、いわばすべての集団が共同体ではない。それぞれの人が、さまざまな場で部分的に多くの基礎集団や機能集団に所属しているにすぎない。だから、集団のなかにあっても、一人ひとり生き方が違うし、パーソナリティも変わってくるんだということを、ずばりといっているんです。

また『コミュニティ十年』では、並木先生が司会をおやりになっていて、冒頭で「コミュニティという言葉がヨーロッパ社会でひんぱんに使われるようになったのは、だいたい一九二〇年から三〇年ごろで、それは働いている人の中での農業就業人口の占める割合が三割ぐらいに減ったころだった」といわれている。それは慶応大学の都市社会学の故奥井復太郎先生がいわれたことなのですが、コミュニティが重要になり、コミュニティが論じられるようになってくるのは、ちょうど農業就業人口が三割の線を割り、かつての地域社会が解体しかけてくる時期だというわけです。そこである人は、かつてのコミュニティに戻したいといい、ある人は、違ったコミュニティに組みかえるべきだという。



同心円的（日本的）関係と多元的（イギリス的）関係

＊『コミュニティ』40号より。

日本でも農業就業人口が三〇パーセントを割るようになってきたのは、昭和三十年代、ちょうど地域社会研究所ができたころです。初代理事長の矢野一郎先生なども、コミュニティというのは旧来の地域共同体ではなく、志を同じゅうする人間がつくった民主的なコミュニティでなければいけないとおっしゃっていました。

次に、『二十周年記念論文集』について。これには私も執筆しておりますが、そのころのコミュニティには、取りあげるような話題がないんですよ。農村では地域共同体がばらばらになってしまって役に立たないし、都会では町内会などが衰退した。それが復活しても、入らない人が多い。結局、町内会などは「入りたい人だけ入ればいい」といった認識になってしまって、コミュニティの比重が非常に軽くなっていったんです。

当時、コミュニティというのは一体何だろうかと非常に考えさせられました。あのころは既存の地域共同体が解体し、もう古い形のものへ帰るわけにいかないし、新しい民主的なコミュニティを目指すといっても、どうやってつくったらいいのかわからない。みんな一生懸命やるんですが、なかなかつくれない。現在でも、なるようにしかならんといったところです。ですが、これから訪れる二十一世紀には、コミュニティがまた違った意味で注目されることになるでしょうね。

高年齢者問題と地域

並木　ところで、現在のコミュニティを考えるにあたって、特にお年寄りに関して避けて通れない問題が多いのではないでしょうか。お年寄りを支えるためには、たとえば地域福祉とか地域医療

農業従事者数の推移
（一六歳以上）
【自家農業従事者総数】
一九六〇年　…一七六五・六万人
一九六五年　…一五四四・三万人
一九七〇年　…一五四六・六万人
一九七五年　…一三七三・二万人
一九八〇年　…一二五三・九万人
一九八五年　…一一三六・九万人
一九九〇年　…一〇三六・六万人
＊農林水産省「農業調査累年統計書」より

などがすぐに利用できるようになっていなくてはなりませんが、なかなか、そういった状況にはなっていないようです。いっぽう、お年寄りはどんどん増えている、特に農村では、そういった問題が進んでおりますね。湯沢先生はずいぶん農村をごらんになり、檜原村のお年寄りの話も聞かれておられますが、いまのような問題で何かお感じになったことはありませんか。（『コミュニティ』第52号「山村女性の生活変動」参照）

湯沢　まず、お年寄りの本音を伺ってみることが大切だと思うんです。たとえば、「昔といまを比べると、お年寄りはどちらが幸せか」と聞いたことがあるんです。そうしたら、非常に明快な答えが返ってきました。「そりゃ、いまがいいに決まってる。昔のじいさん、ばあさんはかわいそうだった」と。

どうしてかというと、「昔の年寄りは、ろくに白い飯も食えなかった。あと二日ぐらいで死にそうだというときに、無理して買ってきた白米を炊いて、これが白い飯だといって出したけれども、結局は食べられないで、白い飯を見ながら亡くなってしまった。それに比べていまは、毎日白い飯が食える」というわけです。

それに「いまは老齢福祉年金はくれるし、働きに出ている子どもは、酒やうまい菓子をもって月に一度や二度は帰ってきてくれる」「昔はこんなことは全然なかった」というんです。要するに昔は「動ける間中働いて、動けなくなったら、それでお終いだったんだから、絶対にいまのほうがいいに決まっているじゃないか」というわけです。

檜原村では、こんなことも聞きました。「昔に比べると、大名に出世したような気分だ」というんです。三、四十年前まで、畳を敷いてある家は少なくて、板の上にむしろを敷いていましたよね。

農業従事者数の推移
（一六歳以上）

【自家農業だけに従事した者】
一九六〇年　……一三〇九・六万人
一九六五年　……九六一・四万人
一九七〇年　……八四二・八万人
一九七五年　……六五六・六万人
一九八〇年　……六〇三・六万人
一九八五年　……五六九・四万人

＊農林水産省「農業調査累年統計書」より

さらに数十年さかのぼると、チフスなどがはやって家族の誰かが病気になると、バタバタときょうだいまで死んでいったというような記憶があります。それに比べて、いまは大名のような暮らしだという。とにかく画然たる差を感じているわけです。

あるお年寄りは息子さんが「東京の中野で働いている」というので「動けなくなったら息子さんのところにいくんですか」と聞きましたら、「なるべくならいきたくない」という答えでした。「ここには仲間がいるし、静かでいいところだ。不便だけども、やっぱりここで死にたい」と本音をもらしました。

並木　ところで、地域によっては六十五歳以上の人口の比率が三割またはそれ以上というところがありますね。アメリカにも同じような面があるので、いったいどうしているのかと聞いてみたのですが、七十五歳で一応の線を引いているようです。七十五歳以上をオールドオールド、それより年齢が低いお年寄りをヤングオールドといって、彼等がオールドオールドと呼ばれる老人の面倒をみているそうです。若い人が面倒をみるよりも、そのほうが話があうというんですね。しかし、日本の過疎地帯の場合など、全部がオールドオールドということもあるわけです。いったいどうなるのかということをお聞きしてみたい。

山梨県あたりではどうでしょうか、今のような問題は。

三枝　くわしくは知りませんが、婦人グループが在宅の高齢者の方をお訪ねして、お風呂に入れてあげるという運動はやっております。高齢者問題というのは、県とか市とかに頼るだけではなくて、結局、自分たちが助けあわなければ解決できないと自覚しているので、そういった意識が非常に高いようですね。それには、男性も巻き込んでいかないとやっていけない。たとえば寝たきりの

平均寿命の推移

一九六〇年
…男）六五・三二歳
…女）七〇・一九歳
一九六五年
…男）六七・七四歳
…女）七二・九二歳
一九七〇年
…男）六九・三一歳
…女）七四・六六歳
一九七五年
…男）七一・三七歳
…女）七六・八九歳
一九八〇年
…男）七三・三五歳
…女）七八・七六歳
一九八五年
…男）七四・七八歳
…女）八〇・四八歳
一九八九年（最新）
…男）七五・九一歳
…女）八一・七七歳
＊厚生省統計情報部の調査より

方をお風呂に入れるにしても、大きな男性のお年寄りの場合、女だけではどうすることもできない。いままで地域づくりは女ばかりでやっている面がありましたが、今後はそうはいかない。定年退職された男の方などを何とか巻き込んでいくにはどうしたらいいか。それを一生懸命考えているようです。

青井　これからはコミュニティがもう一度、非常に重要な福祉機能をもたなければいけなくなるように思いますね。かつてのどっぷりと個人を埋没させてしまう共同体としてのコミュニティではなく、一種のファンクショナル・コミュニティ（機能的コミュニティ）として。

都市化と高齢者問題

並木　高齢者関係の問題は、東京などの大都市に典型的に起こると考えてよろしいでしょうかね。

青井　今後は大都市が一番問題になるでしょうね。

並木　話は違いますが、総務庁の世論調査を見てびっくりしたのは、「住宅に満足していますか」という項目で、「満足している」と答えている人が六五%くらいいるんです。「どちらかといえば満足」「本当に満足」というのを入れますと、七割くらいじゃないでしょうか。東京などの大都市に限れば、地価が高い、住宅関係に不満があるという人が圧倒的に多いはずなんです。ところが、全国ベースでやると、いまのような結果になるんです。ですから、コミュニティの問題を考えるときにも、一極集中している大都市と、田舎のほうとは分けて考えないといけないという気がいたします。

中根　そうですね。

並木　高齢者福祉の問題も同様で集合住宅が多い都市型のところと、三枝先生のお話にあったような地域の結びつきが強い地方型のところを、きちんと区別して対策を考えるべきなんでしょうね。

青井　日本の場合は、基礎的な施設がまだ絶対的に不足しております。厚生省もつい最近、「高齢者の保健福祉推進十カ年戦略　ゴールドプラン」という十年がかりの計画を発表しているんです。その後、地域に密着した老人福祉サービスを展開し、政策決定を市町村レベルまで下ろした画期的なものです。ちょうど西暦二〇〇〇年を目指したもので、それを見ますと、基礎的なものがまだまだ不十分であるのがよくわかりますね。それを築くことが先決です。助けあいみたいなものも必要でしょうけど、とにかく、一番基礎的な施設や制度は、やはり公の手でがっちり作らないといけない。

中根　私は、都市、農村を問わず、高齢者問題で一番難しいのは、独りきりになっている老人の問題だと思いますね。農村でも、日中はみんな仕事で家にいないので、お年寄りが独りだけ家に残ってしまう。

そうすると、非常に寂しくて、だんだん弱ってくるんです。だから、お年寄りを独りにさせない方法を見つけることがとても大事だと思いますね。たとえば、朝、働きに行くときにお年寄りをあずけて、帰るときにまた連れて帰ってこられるような、みんなが寄りあえるところを村の中につくったりしないと、だめじゃないかしら。

並木　託児所と似たお年寄りのものをね。

中根　そう、託児所はちゃんと立派にできているけれど、お年寄りのことがまだあまり進んでいないようですね……。

三枝　託老所というのかどうかわかりませんが、そういうのがぼつぼつできているようですね。お嫁さんが仕事に出かけるときに、車でお舅さんを託老所にあずけて、そして帰りにまた連れてくるというのも、ぼつぼつ……。

青井　デイケアみたいなものね。

湯沢　そういうのを十倍に増やそうということですね。

青井　少なくとも十倍はいかないと。

バランスのとれた施設を

並木　そういったことは、大事なことですね。また、施設の運営や管理のありかたも改善しないと。たとえば特別養護老人ホームとか、いろいろな施設がありますでしょう。そこのお年寄りの暮らし方を聞きますと、ちょっとタバコを買いにいくにも、ひとりでいってはいけないなどという。事故でもあると困るというんで出さない。日本の場合は、そういったことが非常に厳重ですね。

青井　管理責任を問われますからね。

中根　本人が勝手に転んでも、管理側に責任がくるというわけ。

並木　これは基本的な問題だと思うのですが、要するに個人の自立性や責任感が日本の場合は少ないでしょう。管理する側にみんな責任がいくものですから、その管理責任を考えると、お年寄りを外へ出せないわけです。ところが、アメリカなどの老人ホームでは、どんどん外に出かけることができる。車でもよく出かける。非常に自由ですね。そのかわり、事故に遭えば自分の責任になる。

病床数の推移

一九六〇年
…六八万六七四三床
一九六五年
…八七万三六五二床
一九七〇年
…一〇六万二五五三床
一九七五年
…一一六万四〇九八床
一九八〇年
…一三一万九四〇六床
一九八五年
…一四九万五三二八床
一九九〇年
…一六六万一九五二床

＊厚生統計協会「国民衛生の動向」より

日本の老人ホームでも、老人の自立という面をもう少し取り入れないといけませんね。国はとっても、そこまで面倒をみきれないでしょう。

中根　過保護ですよね。

青井　ですから。「寝たきり老人」じゃなくて、日本の場合は「寝かせきり老人」といっているんですね。寝かせきりにしたうえ、人手不足で手を抜かざるを得ない。食事から何から全部ベッドの上でやっていますよね。あれじゃ、どうしても……。

並木　体が弱る。

中根　寝たきりの人がどんどんできてしまいますね。

青井　ある程度起きる時間をつくって、お化粧ぐらいはちゃんとして、自立しなきゃいけないんでしょうが。寝かせきりですからね。

中根　だから、そういったことはやはり地域単位でやるべきだと思うのね。あんまり遠いところの人だと知らない人ばかりだし……。知った人がいるところでないと、お年寄りだって落ち着かないと思うんですよ。だから、細かく地域ごとに、そういったコミュニティをもつ必要がある。

青井　そういえば東京都が、たしか秋田県だったと思いますが特別養護老人ホームをもっていこうとしたことがありましたね。

中根　そんなの絶対反対です。

青井　そんな所へいったら、到底だめだ。向こうは地価が安いからだろうけど、東京でもまだ公用の土地が残っているんですよ。

中根　区のものだったらできるわけよね。

三枝　中央区がやっていますよね。特別養護老人ホームと保育園・中学校と三位一体の施設を。

青井　高齢者の福祉施設は、厚生省のものでも文部省のものでもなく、そういった管轄を全部解消して、共同で造ってもらわなければならんのですよ。

並木　そして、そこに入る人たちは自分である程度の責任をもつことを自覚する。施設側と利用者が両方から接近しないとうまくいきません。

中根　フィンランドでも、老人ばっかりを集めて入れておくのはよくないということがわかってきたので、老人ホームが反対されております。それで、まちの真ん中に小さいマンションみたいなものを自治体などが老人用に買いあげていつでもほかの人と接触できるような方法をとっています。人里離れたところに老人ばっかり集めてしまうのは、よくないと思います。

変わってきた子どもと教育

青井　子どもの教育の問題、これもかなり深刻な問題が起こっていると思います。子どもの数が減ってきていることも、かなり大きな原因だと思います。昭和四十一年（一九六六年）のヒノエウマの年に一・五八に下がって大問題になった合計特殊出生率（一人の女子が一五～四九歳の間に生む平均子ども数）が、一九八九年にそれを下まわる一・五七に下がった。「一・五七ショック」として大騒ぎになりましたが、一九九〇年には一・五四に下がり、一九九一年には一・五三にさらに減ったということです。

私個人の解釈でいわせてもらえば、子どもの数が減るのにともなって、登校拒否とか家庭内暴力

合計特殊出生率

一九六〇年…二・〇〇人
一九六五年…二・一四人
一九七〇年…二・一三人
一九七五年…一・九一人
一九八〇年…一・七五人
一九八五年…一・七六人
一九九〇年…一・五三人
＊厚生省人口問題研究所資料による

とか、いじめだとかの問題が増えたと思います。家族や学校にももちろん問題があるんだけれども、子どもの数が少なくなったというところに最大の原因があると私は思います。ですから、学校だけで問題を解決しようとしても無理です。一人っ子政策を行なっている中国にも注目しないといけませんね。あれがどういう結果を呼び起こすかが非常に問題です。

並木　こういった問題はヨーロッパの先進諸国なども少し先がけて抱えておりますね。たとえばあちらでは、子どもの数が少なくなってから「フリースクール」という言葉をずいぶん耳にします。暴力教室も向こうのほうが先輩で、何十年か遅れて日本に入ってきました。そういう点に先進諸国がどういう取り組み方をしているのか。モデルになるものがあれば、それをお聞きしたいと思います。中根先生、何か思い当たられることがありますか。

中根　その方面については、あまりくわしくありませんが、日本に比べて、ヨーロッパのほうが、こういったことに対処しやすいようには思います。なぜなら、とにかく日本は画一化が強いでしょう。その点で西洋よりも強く、この問題のあおりを食うんじゃないかと思うんですね。

青井　日本の場合、子どもの数でも、国民が一致して二人なら二人ですからね。

並木　そして、その変化が急激でしょう、日本は。

中根　ヨーロッパではよくどうにもならない子どもを引き受けるための学校がありますね。月謝はとても高いんですが……。文部省の行政のもとにあると、そういうことができないんですよね。

青井　日本の場合、穴へ落ち込むときはみんな一緒になって落ちこんでしまう。

中根　そう。だから、ヨーロッパの場合、まだ救われる可能性がありますが、日本はあまりにも画一的な圧力が強すぎて、救われる可能性が極端に少ない。

三枝　お役所に何でも頼っちゃって、自分たちで問題を解決しようとしないんじゃないですかね。

並木　登校拒否児も多くなってきていると聞きますが、これについては？

湯沢　登校拒否がほとんどないところもあるみたいですね。

並木　登校拒否なんかない？

湯沢　ええ。今でも農山村ではほとんど聞かれません。昭和四十年ぐらいまでは「落ちこぼれ」という言葉すらなかったんです。いつごろ「落ちこぼれ」が出てきたかというと、昭和四十何年かの「学習指導要領」の改訂で、急に中学校の勉強が難しくなってしまってからです。ことに数学や理科が難しくなって、ついていけない子どもが続出してしまった。「学習指導要領」の改訂に携わった方々の考えは「頭が柔軟な若いうちに学習させておくべきだ」ということだったようですが、とにかく、やたら難しくなってしまった。中学校はもともとは小学校高等科の延長線で、普通の人なら普通に卒業できるところだったのに……。そんなわけで普通に卒業しにくくなってしまったというわけです。

ちょうどそのころから、進学塾や学習塾が盛んになってきました。大都会では中学生が遅くまで家に帰らないのは珍しくないし、小学校の上級生まで塾づけの子どもがいる始末。ところが先日、大分と宮崎の二県両方で「小・中学生で塾なんか行っている子はない」という話を聞いたんです。大分や宮崎の高校はほとんど一・〇倍の合格率なので、贅沢なことをいわなければ、たいていの子が高校に入れるわけです。そう勉強しなくても少しぐらい落ちこぼれたって、高校には入れますから、ここでは登校拒否もないようです。

中根　地域によっては、そういうところもあるかもしれませんね。

湯沢　わけのわからない、楽しくない授業の連続が登校拒否を増やしていると思います。

青井　私も、偏差値教育に対しては問題を感じています。私の勤めております流通経済大学では現在、一定数の生徒を試験に重点をおかない方法でとっております。

たとえばボランティアをやっている人を書類や面接で選抜し、同時に入学試験も受けさせる。三年間やっておりますが、最初の年は、かなり志望者がおりました。ところが、毎年減ってくるんです。特別選抜をやる時期を変えてみても、あまり志望者が増えないんです。偏差値教育でずっと育てられますと、なかなかそういう者が出てこないのでしょう。

並木　そういったことは、本当に大問題だという気がしますね。最近の子どもは長男、長女ばかりですからね。そして、そのなかには一人っ子も多い。きょうだいが少ないと、人から面倒をみてもらうことは十分してもらっているが、人の面倒をみるということはしておりません。

要するに人を思いやるとか、人のことを考えるという能力が、ずいぶん欠けてきているように思われます。

それから、食生活の動きをずっと見ておりますと、現代は飽食の時代といわれておりますが、加えて、こんなに偏食のできる時代はないと感じますね。昔は食わなければ飢えましたから、出された物を食べなければしようがなかった。ところがいまは、子どもに食べなさいといったって、だめ。小遣いをもっているから、どこかへいって買い食いをしてしまう。そういう意味で教育が非常に難しくなってきた。いつか青井先生が「いや、もう豊かになったら教育はできませんよ」とおっしゃったことがあったのですが、本当にそうだとしたら、困りますね。

青井　飽食は食物だけじゃなくて、テレビの番組にも当てはまりますね。これだけ多くのチャン

ネルがあれば、何でも見ることができますから。そうすると今度は、自分の好きなものしか選ばなくなってしまう。だから、野球が好きな人は野球ばっかりといったように、知らないうちに偏食しているんですね。ある一定のものしか見ない。自分が見たくもない番組を無理に見たりはしませんからね。昔のように、ひとつかふたつしかチャンネルがないと、選ぶことができないので、意外なものに出会いました。でも現代は、そういった出会いがない。現代は情報をも偏食しているといえますね。

並木　いろいろなものに偏食する時代ですね。

三枝　食事の面では、現代はとにかく、家族が同じテーブルで同じ物を食べるということが少ないんですね。時間はばらばら、食事の内容もばらばら。お父さんの帰宅も遅いけれど、小学生や中学生も塾やクラブ活動で遅く帰ってくる。「せめて朝食だけでも一緒にとったら」というと、「眠いから起きるのはいや」とか、それぞれがそれぞれの理由をもっていて、ばらばらになってしまうんですね。家族が一緒に食事をするということが基本だと私などは思うんですが、いまではそれができない家族がかなり多いようですね。

弱まってきた人間関係

三枝　それに最近の親御さんは、自分の子どもは心配しても、近所の子どもさんの面倒はみない。悪いことをしても叱らないし、連帯責任みたいなものもあまりもっていませんね。

中根　それは日本の大きな特色ですね。前からその傾向はあるんですが、よその子を叱らない。

叱ったら親が怒るでしょう。

青井　問題になりますよ。

中根　家庭の外との関係がとても浅いんですよね、日本の場合。これも大きな特色ですね。

青井　昔だったら、家族以外の人に叱られたり、しつけられたりしたんですが、いまは核家族のなかだけで解決しようとする。解決できないものまでしようとしますから、こじれるんですよ。

並木　私の家内は下町、私は山手のほうで育ったんですが、育ったときの話をいろいろ聞いていますと、近所の子どもに対する態度が下町と山手ではやっぱり違いますね。下町は農村的ですよ。よその子だろうと何だろうと、悪いことをしたらちゃんと叱ります。ところが、山手のほうは「隣は何をする人ぞ」じゃありませんが、関わらないでしょう。

それから、だいぶ前になりますが、公務員住宅に住みまして、そこに住んでいる子どもたちに対して、みんなで注意するかしないかということが、問題になったことがあります。お母さんたちが集まって話あったんですが、それはおせっかいだという人と、いや、やっぱりお互いに注意しなくてはだめだという人と半々くらいに分かれた記憶がありますね。

また、うちの子どもがまだ幼稚園とか小学校へいっていたころには、みんなで勤労奉仕をやりまして、遊び場に砂をもってきて、その上に何かを被せて日陰にしました。管理人に頼むだけでは不十分なものですから、みんなで集まって作ったんですよ。ところが何十年かたったいまは、そういうことは一切やらないで、管理人に任せている。ところが、管理人はそこまで面倒みきれない。結局、みんなで子どもをみてやるということが、なくなっているんです。どこからそういうふうに変わってきたのか……。

三枝　高層住宅のコミュニティルームで、子どもたちが遊ばないのも、誰も責任をもってその部屋を管理しないからです。おもしろい遊具もないし、楽しくない。

求められる「豊かさの哲学」

並木　いま出されている問題点の多くは、さきほども中根先生もおっしゃっておられまして、日本人は自立心が非常に弱いということに関係があるような気がします。皆さんお読みになっておられると思いますが、ドーアさんの『二十一世紀は個人主義の時代か』に、まず、イギリスの個人主義を紹介したのち、その特徴を四つくらい挙げているんです。ひとつは、権威に対して抵抗する姿勢が強い。ふたつめは、集団としての結びつきが弱い。三つめは、情緒的な集団性が比較的少ない。たとえば野球やサッカーを見にいったとき、情緒に巻き込まれて集団的な行動に走るという点が比較的少ないということです。それから、四つめが、自分の利益を徹底的に追及する点だというんです。

それらの点がすべて日本人とは違う。日本人は、権威に対して比較的弱いところがある。お上とか何とかいいますよね。それから、集団に依存する傾向がある。情緒的にも、不和雷同的なところがありますね。また、自分の利益を追及するというのも、日本の場合は比較的少ないですね。個人主義を利己主義という意味あいでとったりする。その点、イギリスは違います。そこでドーアさんは、日本はイギリス的な個人主義の特徴をもう少し取り入れ、イギリスはもうちょっと日本的な考えを取り入れてほしいとおっしゃっているんです。結局、日本のコミュニティを考えるときには、

個人主義や自立性、自己責任といったものを、どうして育てていったらいいかということを考えなければならないのだと思います。

それから、もうひとつ。第一号の「コミュニティのあり方」のなかに、さきほども話題に上りました奥井先生が農業就職人口が三割のときにコミュニティがおかしくなり、街頭児というのも、そのころ出てくるという話もありました。「チルドレン・オン・ザ・ストリート」とおっしゃっていた。外で悪さをして遊んでいる子どもに「そんなことをすると親にいいつけるぞ」というと、「おじさん、おれの名前知っているか」といいかえす。それが、「チルドレン・オン・ザ・ストリート」と呼ばれる子どもたちです。

また、やはりその号で、東畑精一先生が「日本人は昭和恐慌の貧しいころに、貧しさなりに生きる方法を知っていた」とおっしゃっている。アメリカから農業経済学者を呼んで農村へ連れていったところ、「日本は貧しいといわれながら、仏さんには花が飾ってある。庭にもちゃんと花を植えてある。アメリカの貧農には、こんなゆとりはとてもありません。えらいもんだ。非常におどろきました」といわれたとおっしゃっている。

しかし、「これからが豊かになり初めだ。では、豊かになったときに、どういう暮らし方をしたらよいのか」とも付け加えておられる。要するに「富の哲学」という点がまだできていないということをおっしゃっておられるんです。

それはどうもいまだにできていないような気がいたします。表面上の豊かさでは、いま、もう世界でトップになったわけでしょう。でも、豊かさに耐えて、豊かさに溺れないで生きるという内面的な生き方はまだできていない。

国民所得の増加と暮らしの変化

並木　ギリシャの悲劇詩人・アイスキュロスが、「文明の滅びは人が苦しみに耐える力をなくしたときに起こる」ということをいっている。これを二十余りの文明の盛衰を達観したトウインビーが歴史研究の大冊に取りあげているんです。要するに、貧しさを通じた創造力、そういった角度から、自分は文明を見たのだということを、あのトウインビーはいっているんです。

そういった点から日本のコミュニティの将来を考えると、豊かさのなかで私たちがどう生きるか、どうコミュニティを発展させていくかという問題は、豊かさのなかにありながら苦痛にくじけない向上心、冒険心、そして変化に対する適応力、これをいかに失わないでいられるかというように言い換えられると思います。残念ながら、まだ答えは見つかっておりません。以前、青井先生にお聞きしたときには、「いや、やっぱり貧しくなけりゃ教育はできません」とおっしゃいましたが。

青井　本当にね。ハングリーの精神がなくなりますとね……。とにかく人間というのは逆境にはかなり耐え得るんです。しかし、順境にはだめ。グラグラッといってしまう。日本も倒れるときは速いほうだと思いますね。おそらくイギリスのようにはもちこたえられないでしょう。

並木　イギリスは順境にわりに強いですからね。だから、イギリスの場合、文明の歴史が長いんでしょうか。それとも、やっぱり個人の自立性に関係があるのかな。

青井　あるかもしれませんね。しかし、その自立性も別の面から見つめると、かなり困った問題があるようです。たとえば、ヨーロッパでは現在、ユーゴスラビアにしろ何にしろ、あらゆるとこ

国民所得の日米比較

一九六〇年
日……三九三億ドル
米……四六八九億ドル
一九六五年
日……七八四億ドル
米……六四七七億ドル
一九七〇年
日……一七六五億ドル
米……九二六七億ドル
一九七五年
日……四三三二億ドル
米…一万四三六六億ドル
一九八〇年
日……九二二四億ドル
米……二四二八一億ドル
一九八五年
日…一万一六四五億ドル
米…三万五七七七億ドル
一九八九年
日…二万四八五二億ドル
米…四万六四六四億ドル

＊IMF"International Financial Statistics"、経済企画庁「国民所得白書」より

ろが独立しようとするでしょう。とてもやっていけないのが目に見えているような小さなところでも。あんまり我を張りすぎると、どうにもならなくなるとドーアさんが嘆いていらっしゃった。

中根　帝国主義時代のイギリスのジェントルマンというのは、財産もあるし、地位もあるし、本当に豊かなのね。そして絶対堕落しないというのがジェントルマンの誇りだった。だから、彼等はスポーツしたり、狩をしたり、読書をしたり、健康的な生活態度を維持したんですね。彼らの誇りがそうさせたのかもしれませんが。

青井　日本も、一人当たりの国民所得が、もう二万ドルを越しているわけでしょう。地域社会研究所ができたころは五五〇ドルだった国民所得が。しかし、二万ドルを越したという実感は、あまりないですね。それどころか、豊かになった気は全然しませんね。

並木　いまでもよく覚えているんですが、五五〇ドルの頃に、後で外務大臣をおやりになった大来佐武郎さんたちと、国民所得を速く千ドル水準にもっていきたい、千ドル水準になったら、日本の抱えている問題はだいたい解決できるだろうと、よく話していたんですね。ところが、とんでもない。千ドルになったらなったで、次々と他の問題が出てきた。あのころの「三種の神器」というのは慎ましやかなものでしたね。電気掃除機、電気洗濯機、それから白黒のテレビでしょう。ところが今は、電気冷蔵庫や電気洗濯機はもちろん、カラーテレビもほとんど一〇〇パーセントに近い割合でもっている。自動車だって、ほとんどの家庭にあるし、ビデオだって一般的でしょう。それに、まだ五割にはいってないけれど、衛星放送のテレビ番組を見ることだって普及している。

青井　あれを見たからといって、特別にどうこういうことはありませんけどね。

中根　それほど見たいとも思わないわね。

耐久消費財保有状況ベスト3

【農家】

一九六五年
①ミシン……（七四・七％）
②電気洗濯機…（五八・六％）
③カメラ……（二九・七％）

一九七〇年
①電気洗濯機…（九〇・六％）
②ミシン……（八五・三％）
③電気冷蔵庫…（八三・一％）

一九七五年
①電気洗濯機…（九八・三％）
②電気冷蔵庫…（八七・二％）
③カラーテレビ（八八・七％）

一九八〇年
①電気洗濯機…（九九・三％）
②電気冷蔵庫…（九九・二％）
③カラーテレビ（九七・六％）

一九八五年
①カラーテレビ（九九・八％）
②電気冷蔵庫…（九八・一％）
③電気洗濯機…（九七・七％）

青井　しかし、五五〇ドルから一五〇〇ドルぐらいまであがったときの差は、かなり大きかった。なにしろ日本の国民所得が五五〇ドルの当時、アメリカでは、大学でも朝起きてお湯を使って顔を洗い、トイレの紙タオルをバサッと取って手や顔を拭いて、会社なり学校に出かけていた。「すごい国だ」と本当に驚いたものです。そして、国民所得が一五〇〇ドルになったころには、日本もそれに追いついた。一五〇〇ドルぐらいにあがったころまでは、国民所得が倍になったら生活水準も倍だけの何かがあったんですよ。ところが、一五〇〇ドルを越えると、われわれの生活に大した差はない。

並木　一万ドルでも二万ドルでも大した差はない。

青井　ちっとも差はないですよ、二万ドルになってもね。それに、一人ひとりの国民を、それぞれ少しでも豊かにするには、それなりに大がかりな設備が必要になる。たとえば、発電所ひとつつくるのにも、目に見えないところでものすごく金がかかりますからね。いろいろな問題が起きてくる。

並木　多少の豊かさを感じるのは、海外旅行をしたときですね。比較の問題で、やっぱり円が強くなったという感じはしますよ。

環境問題にもコミュニティの力が必要

三枝　一人ひとりの国民が豊かさをあまり感じなくても、豊かさのツケは確実にたまってきておりますね。そういったツケの一つに、環境問題があげられると思います。この問題についてブラジ

一九九〇年
①カラーテレビ…（一〇〇％）
②電気洗濯機…（九九・二％）
③電気冷蔵庫…（九八・一％）
＊経済企画庁「家計消費の動向」および同「消費と貯蓄の動向」より

耐久消費財保有状況ベスト3

【非農家】
一九六五年
①ミシン……（七八・五％）
②電気洗濯機…（七二・二％）
③電気冷蔵庫…（六二・四％）
一九七〇年

ルで先ごろ環境サミットが行われましたが、そういった国際的な立場から問われるべき問題に対してお金を出すのももちろん必要なことですが、地域のコミュニティがやらなければどうすることもできないたくさんの問題があるのではないかと思います。そういった活動はささやかなことのように思われるかもしれませんが、環境問題にうまく対処できているところは、まず地域の活動があり、それに企業と行政が結びついて初めて成功しているわけです。

ところが、日本の場合はなかなかその三つが結びつかないですね。もちろん、地域の人たちで、ごみを分別して集めたり、リサイクル活動などをしたりと、そういった活動をやり始めているところはたくさんあります。また、熱心に企業に働きかけたり、行政に働きかけたりしている。結局、これらの活動が実際に実っていかないと、環境問題というのは解決がつかないだろうと思うんですね。ですから、まさにいま、コミュニティの発揮が求められていると思います。

青木　いまはまだ、余力がありますからね。しかし、二十一世紀になると、日本も余力を失うんじゃないですか。

「転勤」で阻害されるコミュニティ

湯沢　地域のコミュニティ活動が軌道に乗らない理由のひとつに、家族単位の移動がはなはだしくて、定着性がないということがあげられると私は思うんです。たとえば、一年半前に私の家で孫が生まれたんですが、出産前に保健所の講習会で知りあった近所の出産予定の方が七人ぐらい集まって、「ラッコの会」という会ができたんです。産後交代で一月に一回以上、何だかんだとお互いに

①電気洗濯機…（九一・六％）
②電気冷蔵庫…（九〇・八％）
③ミシン……（八四・四％）
一九七五年
①電気洗濯機…（九七・五％）
②電気冷蔵庫…（九六・七％）
③電気掃除機…（九二・九％）
一九八〇年
①電気冷蔵庫…（九九・一％）
②電気洗濯機…（九八・七％）
③カラーテレビ（九八・三％）
一九八五年
①カラーテレビ（九九・一％）
②電気冷蔵庫…（九八・五％）
③電気洗濯機…（九八・一％）
一九九〇年
①電気洗濯機…（九九・六％）
②カラーテレビ（九九・四％）
③電気掃除機…（九八・九％）
＊経済企画庁「家計消費の動向」および同「消費と貯蓄の動向」より
＊以上のデータは国勢社『数字でみる日本の100年』を参照しました。

知恵を聞いたりして、うまくやっていた。ところが、一年半もたたないうちに、三人も抜けてしまったんです。理由は、旦那の転勤。国内の転勤の場合もありますが、二人は海外でした。中近東へいったのが一人、カナダへいったのが一人。残ったメンバーでいまでも続けていますが、始めた当時に比べてかなり弱体化しています。

それから、私の家内が家の一室で「ポケット文庫」という小さな児童文庫をやっております。登録している子どもは幼稚園児から中学生ぐらいまで七十人ほどです。毎金曜日に三十人くらいきます。三十人も集まりますと、かなりいろんなことがあるようで、悪口ばっかりいう子がいたり、ほかの子の頭をわけもなくなぐって歩く男の子もいる。「そんなことしたらだめじゃないか、おとなしくしないんだったら帰りなさい」というと、一応おとなしくなる。通い続ければ、それなりにいい子になってくるんです。そういうふうに、根気よくしつけたりもするんですけど、なかなか三年は続かない。これもまた親の転勤です。近くにあるのが銀行の寮だということもあるんですけれど、実に入れ代わりが激しいですね。だから、定着して何かをつくりあげるということが、なかなかできないんです。

中根　やっぱり同じところで二代ぐらい続かないとだめね。

湯沢　どうしてあれほど転勤しなくてはならないんでしょうね。

並木　「企業とコミュニティ」を特集した『コミュニティ』四九号に、企業のなかにどれだけコミュニティ精神があるかという問題と、その企業がいわゆる地域社会に対してどれだけ貢献するかという話が出ております。結果として、会社のなかがうまくいっている企業ほど、外に対してもいい態度をとっているということをドーアさんが指摘されていたと思うんです。ドーアさんは『二十

一世紀は個人主義の時代か』というお話をなさったときに、ヨーロッパの場合、一～二世紀の間、自分で物を作り、自分で判断し、そして自立する歴史的な期間を経て自営業が近代社会へ入ってきた。

ところが、日本の場合は、そこを一挙に飛び越えてしまって、封建的な集団主義から企業的集団主義へいってしまった。そういったこともあって、日本にはなかなか自立性が生まれにくいとおっしゃっていた。企業にもう少し、個人の自立性やコミュニティを育てる方面に目を向けてもらうのが、ひとつの方法かもしれませんね。

青井　ある風潮ができると、それに同調する人がドッとまた出てきますからね。

これからのコミュニティについて

並木　いろいろお話が出ましたけれど、最後に付け加えたいことがございましたら、お話ください。

三枝　環境問題に関連したことなのですが、牛乳パックを集める運動は山梨の大月市の主婦グループから始まったんです。彼女たちがそういう仕事にとりかかったのは、「このままでは子どもの教育上よくない」ということが動機だったというんですね。それが物を大切にしましょうとか、ごみを減らそうという運動につながっていった。これは非常におもしろいことだと思うんです。子どもの教育の問題に、ひとつの光が差してきているような気がいたしました。

湯沢　やはり『コミュニティ』第六二号の座談会で以前、長野市の近くの農村文化協会をやって

らっしゃる活動家の堀越久甫さんが、「長野市周辺では、会社、企業がいろんな福祉サービスをやってくれるのはいいが、やれ運動会だお祭りだとかいって、会社ぐるみで日曜も祭日も使われてしまうのは困る」とおっしゃった。コミュニティの人材がそっちへとられてしまって、自分たちがやっている地域のコミュニティのお祭りへ人が来なくなってしまうというんです。会社が資金や何かを請け負ってやってくれたほうが景気がいいし、運動会の回数だってそっちのほうが多いわけです。しかし、そのおかげで、村の小学校でやってきた運動会なんかがつぶれていくのは由々しき問題だというわけです。「だから村がつぶれてくるんだ」と非常に憤慨しておられた。「企業がよけいなことをしないように法律をつくってほしい。物をつくる製造会社は、物をつくるだけ。運送会社は運送だけというふうに制限をしてほしい」といっておられました。

私は、ヨーロッパだったら、会社は絶対にそんなことしないと思うんです。会社での人づきあいをもっとクールにとらえて、会社では、その目的に沿ったことだけやる。また、仕事を終えた後や休みの日には、地元で家族と一緒にサッカーチームや野球チームをつくって楽しむわけです。日本人は自発性が足りないのか、依存性が強すぎるのか、大きなところがやると、みんなそれになだれ込んでしまって、ちっとも自分たちでやろうとしない。しかしこれからは、労働時間の短縮、五時なら五時で仕事を終わって帰るようにし、五時以降は市民が自分の頭で考えて、自分の努力で、何か自分たちでやろうと集まる機会を作らなければだめだと思う。そうしたときに、コミュニティがまた復活するのではないかと思います。

青井　私は子どもの問題に関して一言。子どもの数が少なくなってくると、親のほうはどうしても過大な期待を子どもに課すと思うんです。特に一人っ子の場合など、どうしても過保護になりま

すし、干渉が多くなる。やるなといっても、過干渉になるでしょう。

いま、上海の調査をやっているんですが、中国も「一人っ子政策」のことで、何かの手を打とうとしているんですよ。ばらばらになった一人っ子に幼稚園とか託児所で集団生活をさせる。一方、親の教育もやらなければいけないということで、「親業」の教育にも取り組んだりして、いろんなことをやっているんです。一人っ子の場合でも、おじいちゃん、おばあちゃんのところに、いとこがみんなで集まって、二人とか三人の状況をつくる。きょうだい代わりのいろんな体験をするというようなことをやっているんですけれども、肝心の子どもがなかなかそういうところへ出ていかないそうです。

こういった問題は日本でもいろいろあるんだけれども、ただひとつ言えることは、大人が計画してしまったら、あまりいい結果にはならないだろうということです。本当は、子どもだけで生活できる余裕があって、子どもたち自身でいろんなことをやらなければいけないんだろうけれども、どうしても大人がやってしまう。

それがまた、さらに解決がつかないような問題をつくってしまっているような気がするんですよ。特にこれといった名案はないんですけれども、子どものことも、コミュニティのことも、第三者ではなくて、自分たち自身で体験して、乗り越えていかなければならないんじゃないだろうかと思います。かなり難問ですが……。

並木　だいぶ宿題が残りましたけれども、このへんで終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

（一九九二年六月十日開催）

●特集――日本のコミュニティ

【鼎談】

隣近所と日本人

【司会】加藤秀俊　かとう・ひでとし　放送教育開発センター所長
【出席】テオドール・ベスター　Theodore Bestor　米コロンビア大学教授
デビッド・プラース　David William Plath　米イリノイ大学教授

日本人にとって、近所づきあいとは何か。過去と現在、そして外国と比較しながら、日本人の人間関係とコミュニティを問う。

日本の近隣社会と私

【加藤】私たちがいっしょに暮らしている人たちといいますと、まず家族があります。しかし、家

族といいましても、昔と違って、とりわけ都市では家族・親戚ともにかなり遠い所に住んでいます。となりますと、わりあい身近なお付き合いは近所の人たちということになるでしょう。

昔は「向こう三軒両隣」と言いましたけれども、この近所の人たちとのお付き合いは、どんなふうになっているのか。以前と違いまして、団地に住む人や高層住宅に住む人などが増えてきましたから、近所といっても、あまり関心のない方もいらっしゃるかと思います。しかし、隣近所なしに、私たちは暮らすことはできないのであります。今日は近隣社会と申しますか、ご近所の人たちと私たちの関わりを勉強してみようと思います。

たいへん幸いなことに、日本のそうした近隣社会について、長いあいだ研究なさっているアメリカの先生がお二人お見えになっております。

まず、テオドール・ベスター先生ですが、コロンビア大学の文化人類学の先生です。詳しくは後でお話をいただきますけれど、市場の研究、それから商店街の研究をなさっており、今日は主として商店街のお話をうかがえるかと思います。

それからもうお一人は、デビッド・プラース先生です。プラース先生も人類学者であります。もう四十年ぐらい、日本のほうぼうの農村、漁村などを研究なさっています。

このお二人のお話を中心にしながら、私自身が経験したことも含めて話を進めていきたいと思います。まず、ベスター先生が研究しておられ、また、そこの人たちといっしょに暮らしておられた商店街について、そういうところにどうして興味をおもちになったのか。そして、どういうことを発見なさったのか。そのへんから、お話いただきたいと思います。

【ベスター】そうですね、東京の町の日常生活、その町の人間関係とか地域社会のそれぞれの団体の役割とか活動に、なぜ興味があったかと申しますと、まず、アメリカの都市とかヨーロッパの都市では地域社会の人間関係が非常に少なくなってしまったのに、東京ではなんとなく残ってるらしい。その面から興味があったので、では、東京の普通の町の皆さんが、どういう付き合いが大切だ

と思っているのか、そういうテーマがきっかけになりました。

【加藤】ベスター先生の日本初体験は十五歳のときだそうですが、そういう町に受け容れてもらうまでに、ずいぶん時間がかかりませんでしたか？

【ベスター】私が入ったのは品川区大井町のすぐそばの町（仮に「宮本町」とよぶ）ですが、そこに行ったのは一九七九年でした。すぐに溶け込めたというのではなく、まあ、二か月か三か月ぐらいかかりました。が、だんだん隣近所の人たちとか町内会の役員さんとかと付き合いができて、簡単な過程ではありませんでしたが、結局は皆さんが受け容れてくれました。

【加藤】そうですか。プラース先生は今までに農村・漁村、いたるところの調査歴がおありですけれども、とくに力をお入れになっていたのは確か伊勢の志摩の海女のいる漁村ですね。どうして、そういうところに興味をおもちになったのですか？

【プラース】きっかけとしては、いくつかありました。学問的な要因と個人的な要因があります。学問的な要因といえば、それまで農村で一年間住込みで調査したこともありましたし、また、神戸・大阪あたりの大都会でやはり一年間ぐらい住込みで調査をしたこともありました。しかし、漁村のほうですね、海辺のほうの日本文化・日本社会については、まだ直接味わったことがなかった。それで、今度は「海の幸」を味わってみようということでした。もうひとつは、あの頃とくに老人問題、老後問題に興味があったことです。漁師さんなり海女さんなりは、七十歳、たまには八十歳までずうっとフルタイムで毎日海に出て仕事をしています。それにも興味がありました。また、個人的な要因としては、ぼくは朝鮮戦争のころ三年間、海軍にいっており、大陸の真ん中の育ちなのに、海のことに興味をもつ経験がありましたから、それも要因の一つです。

【加藤】わかりました。ところで、ベスター先生。調査されたのは、都市の中の商店街ですが、商店街といってもすぐそばは住宅地ですよね、あのへんは。

【ベスター】はい、そうですね。

テオドール・ベスター氏

◎1951年、アメリカ・イリノイ州に生まれる。社会人類学者。高校生のとき、初めて来日して以来、通算で約7年ほど日本で過ごす。都市コミュニティつまり町会の活動や都会の人間関係を研究。著書に、その研究と体験をまとめて書かれた『わが町・東京』がある。

【加藤】そういう商店街ならびにその近隣社会にお入りになって、とくに印象ぶかかったこと、あるいは発見されたことの中でおもしろかったことといいますと、どんなことですか。

【ベスター】そうですねえ、私はアメリカ人ですから、ずうっとアメリカの都市で生活してきたのですが、だいたい隣りの人が何をやっているか、ぜんぜんわからない。五年、十年暮らしていてもね。　だけど、あの宮本町の場合はだいたいみんなが非常に詳しく隣近所の生活を知っているんですよ。そして知っているだけじゃなくて、非常に人間関係が密接で、いろいろな助け合いもある。それぞれの町の団体、たとえばPTAとか消防団とか商店会、町内会、隣組、それからそれぞれの宗教的な「講」、それらいろいろなものを通して、同じ人間のあいだでもさまざまな関係をつくっている。経済的な関係もあるし政治的な関係もあるし、子ども同士の遊びを通した関係もある。そういったさまざまな関係を全部かさねてみて、地域そのものが非常に大切な生活の場面、場所だと思いました。それが一番おもしろい点でしたね。

【加藤】いま、「講」といわれたけれど、たとえば「富士講」とか「白山講」とか、具体的な名前で残ってるんですか？

【ベスター】そうですね。それから、その町のお稲荷さまがあって、そのお稲荷さまの講もあります。それはまあ、だいたい老人のメンバーが多くて、その町の老人会とその稲荷講がなかなか関係が深い。

【加藤】プラース先生は伊勢の海女の村で調査されたわけですが、そこでの近隣社会といいますか、隣近所の関係は都会よりはこまやかだと思うんですけれど、どんなことがおもしろかったですか？

【プラース】ええ、おっしゃるとおりですね。だけど、ぼくの調査のテーマは、最初はそういうことではなかったのです。漁師さん、海女さんのライフヒストリーとかライフサイクルを調査しようとしたんです。

それで、すぐ受け容れられたかという点では、これはもう、行ったとたんに、すぐ喜んで相手に

加藤秀俊氏

してくれたんです。ですから、二、三週間たたないうちに、いろんなライフヒストリーのインタビューはしたんですけれど、終わってからライフヒストリーとして見てみますと、どうも、なんか浅いものだと思った。しゃべってくれないというわけじゃなくて、こちらのほうから適当な質問を出していないからなんですね。

というのは、一人の人のライフヒストリーを地域社会と切り離してとるのは間違いです。切り離すことはできないのだから。それから社会的環境の中のライフヒストリーが研究目的になってくるんですね。一人の人のライフヒストリーだけ出しても、あまり味が出ないし、簡単にすぎたものになってしまう。そしてやっと、すこしずつ、どういう質問をしたらいいかがわかってきています。それが大きな発見ですね。

【加藤】これは調査の方法論に近い話かもしれないけれど、私自身も友人の米山俊直さんと二人で、二十歳台のときでしたかね、最初に行ったのが奈良の二階堂村という村だったんです。けれども、伝統的なコミュニティというのは、よその人が入ってくると、かなり拒否反応を示しますでしょ。何のために来たのか、ひょっとすると税務署の人が来たんじゃないかとか。

ですから最初三週間ぐらいは何もしないで、村の人といっしょにお酒を飲んだり、子どもの宿題みてあげたりして暮らしているうちに、だんだん打ち解けてくれる。そういう関係を作るまでが、なかなかたいへんですね。

【ベスター】そうですね。わりあい時間がかかりますけれど、私たちの場合は、その町に住み始めてから三週間か一か月くらいあと、夏の盆踊りの大会があって、そこへ私と家内にお客さんとして招待がきました。それでお客さん用のテントで写真をとったり、そこではぜんぜん、普通の付き合いのような関係にはならなかったのですけれど、その次の日、私はフィールド・ノートのために、祭りのため誰が寄付したかを全部メモしていたんですが、そのメモを書いていたときに、町内会の若い男の人たちが祭りの設備、提灯とかを全部取りに来ましたので、私は当然、いっしょに手伝っ

デビッド・プラース氏

◎文化人類学を専門とし、昭和20年代から日本文化と日本人を研究。現在の研究フィールドは志摩の漁村で、海女たちのライフサイクルを調査し、日本社会や日本文化についての論文は、すでにそのいくつかは日本語に翻訳されている。

たんです。そして終わってから、「じゃ、いっしょにビール飲もうか」と聞いたんです。それから親しくなった。それが最初の段階ではなかったかなと思います。

【加藤】参加していっしょに仕事するというのは、たいへん大事なことですね、どんな社会に入ってもね。

【プラース】私の場合は、二つか三つ、段階がありました。ある意味では、行ってすぐ溶け込んだというとおかしいけれど、いい気持ちで入れてくれたというほどのことが、行ったとたんにありました。なぜかというと、私の日本人の同僚でも友人でもある方が前々からそちらで調査したことがありましたから、私を紹介してくれたんですよ。彼の紹介で入ったから、行って荷物をまだ完全に下ろしていないうちに、海女さんのだれかが近付いてきて、「船がもうそろそろ出る。いっしょに行かないか」と呼びかけてくれました。その意味で、インタビューの相手になってくれたという点では最初の日からそうでした。けれど、もうちょっと深く仲間入りできたのは、一月ぐらいたってからです。皆さんご存じと思いますが、浜辺のほうに海女小屋があるんですね。海女さんが仕事を終わってから集まったり着替えたりしているところです。一月ぐらいたってからはもう、ぼくは、その小屋にいつ入っても問題ない。海女さんが着替えていても。ただ、写真をとってはいけないけれど、いつ入ってもかまわない。よその人は簡単に入れてくれないところですよ。第三段階は、三回目に調査に行ったころです。最初の二回は夏休みを利用して一月だけ二回行って、三度目はやはりだいたい一年間住込みしようとしたんですけれど、前もって手紙を出して、空き家とかそういうところがないかとお願いしたんです。一番親しい海女さんにですね。そうすると、見付けてくれただけじゃなくて、自分で二日ほどかかって、その家を片付けて掃除してくれたんです。いやまあ、これならと思いましたね。この人は、早く言えば海女頭、いちばん年配の方ですけれど、今は七十何歳、とにかく五十数年、海女さんとして潜ってきた大経験者です。とにかく十年前からずうっと何度も会ったりして、いろんなことをいっしょにしたりして、いつだっか、彼女から言われたんです。

「いっしょに年とっていこうか」とね。これは非常に印象ぶかいことです。

隣近所の人間関係

【加藤】その漁村社会のなかでの近隣関係は、向う三軒両隣的なものなのか、あるいは、さきほどおっしゃった「講」のようなものなのか、どんな結論が？　また、興味がおありになるのは？

【プラース】いろいろありますね。ただ、一つ二つの例を申し上げますと、私が住んだ地域から十分ぐらい歩いた所に野菜畑があって、とくに女性たちはほとんど毎朝、潜りにいく前に、野菜畑を耕しに行きます。そして帰りに、すれちがった隣近所の人に自分がとったダイコンとかを「やあ、一本いかが」、そういうごく簡単な隣り同士の交換がしょっちゅう見られます。それが一つ印象ぶかいことです。しかしこれは日本的と感じたというより、むしろ、ぼくの若いころを、なつかしいなあと思い出しました。戦前の話になりますけれど、アメリカの中西部の小さな田舎都市では、ほとんどの家は裏に野菜畑があって、隣近所の人と腕自慢のリンゴとか何かを交換していました。

もう一つの例をあげますと、野菜のすぐ近くのところに墓地がある。毎朝七時ごろ、大勢が墓参りする。だから情報交換の場として、ものすごく大事です。それがわかってから、ぼくもしょっちゅう墓地に行ったんです、昨日のうわさ、どうのこうのを聞くためにね。

【加藤】野菜畑の話とアメリカの中西部の話が出ましたが、私もわずかな期間ですけれども、中西部の小さな町にいました。そこはトウモロコシしか作っていないところでしたけれども、近所の人が夕方、トウモロコシを持ってきてくれるんです。そして、「トウモロコシはもいでから三分以内にお鍋に入れなければおいしくないから、すぐお鍋に入れなさい」といって。子どもともずいぶんいっしょに遊びましたしねえ。アメリカの郊外の住宅地の近隣のお付き合いというものを、私はずいぶん感動ぶかく経験しました。今でもアメリカには、そういう伝統が残っているんでしょうか？

【プラース】場所によりますね。まあ、印象としては、ぼくの小さいころと比べて、だいぶ薄くなったんじゃないかと思います。たとえば、今住んでるところの隣近所の付き合いは、まだいくらか、トマトの交換とかはしますけれど、昔ほどではないですね。

【加藤】私が中西部の小さな町に行ったのは六〇年代でしたけれど、家に鍵をかける習慣が全然なかったですね。三日とか一週間留守にしても、郵便物でも何でもずっと玄関の前に置いてありましたね。だから私はとてもいい印象をもっているんですが、このごろはアメリカもずいぶん危なくなってきたといいますね。

【プラース】このごろは中西部の小さな都市でも、たいてい鍵をかけるし、だれか隣りの人が郵便物をあずかったりするわけですね、常識として。

【加藤】再び日本に話が戻りますと、いろいろお話してきたような隣近所のお付き合い、それを支えている団体として、いろいろな会とか講があるというお話が出ました。では、どんな年中行事とか、あるいはどんなときに隣りというのは大事なんでしょうね。

【ベスター】そうですね、まあ、とくに秋祭りのときには隣近所の関係が大切ですし、いろいろな形で非常によく見られます。たとえば、寄付。みんなが出して、祭りの総会事務所、お旅所の前に全部書いてペタンとはってありますね。それには、いい面もあるし悪い面もあるかもしれないんですが、そういったコミュニティ、近所付き合いのパターンがよく見られます。

【加藤】私のところへも、おみこしが出るときに町内会長さんが回ってきまして、寄付をします。三千円か何がしか寄付しますと「金三千円也　加藤秀俊殿」と書いてはりだされるのを見て、今度はまわりをながめると、だれが住んでるのかが、そこで初めてわかるということがありますね。

【ベスター】そうですね。私の場合は、もちろん自分自身も寄付を出す必要があると思ったんですが、金額がいくらか、全然わからなかったんです。この町で研究させてもらうので、いろいろご迷惑がかかるかもしれないし、一万円にするか五千円にするか、非常に迷った。それで、大家さんに

◎祭りの人びとともに。

相談したら、「いや、おまえは若いし、学生だから三千円でいい」って。「はい、わかりました」と三千円に決めたのですが、一万円出していたら、かえって偉そうなという批判が出ていたかもしれません。

【加藤】そうなんです。たくさんお金をはらった人から順番になりますからね。だから、ちょうど中ぐらいのところにいるのがいいのかもしれない。

【ベスター】だけど、どれが中、どれが上、どれが下なのかが全然わからないでしょ、よそから来ると。

【加藤】そうですね。ところで、とりわけ大井町などの場合、私も商店街とすこし付き合ったことがあるんですけれど、すぐ裏に住んでいる住宅地の人たちが買い物に行くのに、このごろは、たとえば電気製品だと秋葉原だとか、着物はデパートだとかに買いに行きますね。それで商店街の人たちと消費者とのあいだに何かテンションというか、緊張が生まれてませんか。

【ベスター】まあ、そうですね。とくに最近、商店街は、ちょっと閑散とした感じです。けれど、テンションはそれほどないと思います。おっしゃるとおりに、電気製品は秋葉原とかに行きます。だけど、ほんとの日用品、野菜とか果物とか、歯みがきとかはまだまだ隣近所の八百屋さんとか薬屋さんとかで買い物をする人がけっこういると思います。

【加藤】隣近所といいますのは、「遠くの親戚より近くの他人」という諺もあるように、たいへん大事な人たちなんですけれども、それが〝ムラ〟の社会ですと、相互依存といいますか、相互扶助組織になっていますでしょ。しかし、だんだん都市化が進行してくると、隣近所がだれなのか、わからなくなってきはじめている面を私は感じるんです。とりわけ、いま私が住んでいるところは、まわりが全部、共同住宅になっています。しかも、出入りがとても激しいですから、朝、道で会っても「おはようございます」という相手がだんだんいなくなっている。

【ベスター】そうですか。

【加藤】そういうことを考えますと、志摩の村などはまだ小じんまりとしているから、人それぞれが、あれはどこの人だとわかりますけれど、東京とか大阪という大都市圏の、しかも真ん中のほうにきますと、だんだんわからなくなってきているんじゃないかという気がしますがね。

【ベスター】それはそうだと思いますが、東京の場合は、そんなに壊れなかったと思います。実際に統計を調べたわけではないので何割かはわからないけれど、たとえば昨今は七割ぐらいの住民はあまり近所付き合いをしなくなってきているとしても、残りの三割は昔のように毎日あいさつしたり、いろいろな情報交換をしたりしている。そのパーセンテージはどんどん少なくなっているんでしょうけれど、それでも近所の人との付き合いのレベルが昔とあまり違わない人たちもまだかなりいると思います。

老人と子どもとコミュニティ

【加藤】私自身が経験し、調査した話ですが、どうやら日本のコミュニティ、アメリカもひょっとするとそうかもしれないけれど、女性と子どもと老人で近隣社会が成り立っているんじゃないかという気が、ときどきするんです。このごろは女の人が働くようになりましたけれども、男の人はだいたいサラリーマンになってしまいましたから、みんな勤めに出ます。とりわけ団地なんかだと、残っているのは主婦と子どもさんとお年より。そして子どものない夫婦というのは、わりあい、さみしいんですね。子どもが生まれて幼稚園に通うようになると、子どもを通じて、はじめてお母さんたちが仲良くなるというようなことを自分で経験していますけれど、そういう婦人会とか子ども会とか老人会とかは、どんなふうでしょうね。

【プラース】町のほうで作られた老人会とかの組織もありますが、海辺のほうのコミュニティでは、老人でも身体が不自由でないかぎりは、なんとかして働いています。おっしゃるとおり、昼間は歩

◎三重県志摩町の海女

いてみると、ほとんど老人と学校に上がっていない子どもばかりです。主婦たちもいない。海女さんに行ったり、あるいは真珠養殖の仕事に行っている。だから中年の方々は一人もいないんです。

おもしろい話が一つあります。海岸のほうの真ん中あたりに、昔からいくつかの祠があります。富士山のとか御嶽山のとかですね。十数年前にだれか、その神さんのおかげで病気がなおって、そのお礼に多少のお金を寄付したんです。祠を立て直して、まだお金があるから、見晴らしのいいところでもあるので、老人の憩いの場を作った。ところが、老人は忙しい。それで人類学者がちょっとした滞在するときにただで使わしてもらっています。見晴らしもいいし、村の真ん中だしね。

【加藤】なるほど。老人クラブじゃなくて、人類学者クラブですね。

私は北海道の鷹栖町というところでちょっと勉強したことがあるんですけれども、同じようなことがありましたね。昔は、といっても十年ぐらい前までは年寄りがただ集まっておしゃべりをしたりゲートボールをしたりする老人クラブがある村だったんですけれど、そこの村でも高齢者の方が実によく働いて、ヒマワリを作ったり、トウモロコシを作ったりしています。とくに大豆を作って、その大豆から味噌を作り、その味噌を小学校の給食用に町に売るんですよ。そして老人クラブが集めたお金で、皆で温泉旅行に出かけたりしている。

九月十五日、「敬老の日」というのがありますね。ところが、この「敬老の日」という言葉は気に入らないといって、「長生き感謝の日」といって自分たちで行事をやるんですよ。それ以前は町長さんが「敬老の日」にお年寄りを集めて金一封あげたり何かしていたんだけれども、このごろ、その町では「長生き感謝の日」に、むしろ町長さんをお客さんにして、お客さんにお年寄りのほうから「ありがとう」とお礼を言う。ずいぶん日本の老人も変わってきたと思います。

【ベスター】いい考えですね。

【加藤】プラースさんは伊勢・志摩だけじゃなくて、ほうぼうの日本の村落社会に入って、ずっとご研究なさってましたね。日本にはまだ本当の農村社会あるいは〝ムラ〟というものがあるでしょ

うかね。難しい質問かもしれないけれど、テレビはどこに行っても見れる、スーパーに行けば何でも売っている。都市と農村の生活が同じになってきているといえませんか。

【プラース】まあ、同じかどうか、とにかくものすごく近付いてきていますね。ちょうど一月ぐらい前に、三十年ほど前に滞在して調査した信州の村に行ってきたんですけれど、やはりもう、わからなくなったぐらい変わりました。ぼくらが住んだ家の裏は大きなスーパーマーケットのパーキングになっていました。滞在した三十年ほど前は、ずうーっと畑ばかり、田んぼばかりだったのに。

ところで子どもの遊びとか遊び場についてですけれど、三年ぐらい前でしたか、伊勢・志摩の村の浜辺で老人たちと話していました。そのとき、子どもが浜辺に一人もいない。ちょうど七月二十日あたり、学校が夏休みに入ったばかりのときですが、子どもは一人も海のほうに遊びに来ていない。みんなコンピュータ・ゲームなんかやっているらしい。これは老人たちにすると、すごく惜しいことです。せっかく、きれいな海辺があるのに。

【加藤】子どもの遊びがだんだん室内化しているということもありますね。道路に出ると自動車が危ないし、空き地はあまりない。ですから子どもは家の中に入ってコンピュータ・ゲームをやったり、小さな自動車のおもちゃを持ち込んだりして、子どもがずいぶん閉鎖的になっているような気がしないでもない。

【ベスター】そうですね。私の経験だけですけれど、十年前とか十五年前に比べると、確かにそうだと思います。個人的な世界を作って、あまり人間の付き合いとかはできないかもしれないですね。

隣近所の信頼感が人間社会の基本

【加藤】それは本当に隣近所が必要なのかという問題につながるかもしれません。あれは確か昭和の初年だったと思いますけれど、「秋ふかし、隣は何をする人ぞ」という有名な俳句だか川柳だかが

ありますね。これには二つ意味があって、「隣は何をする人ぞ」というのは、お隣が何をしているのか知らない。知らないことは寂しいことだという意味が一つありますね。壁一つ隔てて、たとばベスターさんがいる。だけど名前も知らないし、会ったこともない。何をしているかもわからない。だから寂しい。

もう一つは、このごろのはやりの言葉でいうとプライバシー。だれだか知らないからプライバシーが守られてていい。

これについて、なぜ都市生活がいいかという調査がありまして、それがとっても、英語で言うとアンビヴァラント、両立しがたい答えが出てくるんです。一つは都市に住むと隣近所との付き合いがないから、わずらわしくなくていいという答え。それから都会の悪い面はどこかと聞くと、隣近所との付き合いがないから寂しいという。

【ベスター】それは確かにそう。

【加藤】ふたつの矛盾した事柄がありますね。全世界的にどんなものでしょう、この隣近所というものは、比較社会学的にいうと。

【プラース】それは百年ほど前からの社会学の一番大事なテーマの一つではないかと思うんですけれど、ごく一般的な傾向と申しますと、おっしゃるとおり人間関係が薄くなっている傾向があるんでしょう。それは場所にもよりますし、歴史にもよる、文化にもよります。しかし、完全に消えてしまうかというと、ぼくはそうならないと思う。

【加藤】完全に消えることはないでしょうね。

【プラース】ないと思う。なんとか別の形で続いていくんじゃないかと思います。

【ベスター】完全に消えると、それはもう人間の社会ではないでしょう。加藤先生がおっしゃったとおりに、子どもが最近、閉鎖的になる傾向がけっこう見られるんですけれど、地域社会、近隣社会は何よりも子どものために守ったほうがいいと思います。子どもの時代から人間同士の付き合い

とか人間関係、何よりも人間が助け合うことが大切だと地域、近隣社会を通して学ぶことがないと、ほかで学ぶことはできないかもしれない。そういった意味で、近隣社会というのは非常に大切だと思います。

【プラース】うちの子どもは独立してしまっていますから、近隣社会はむしろ老人のために残してもらいたいですけど、とくに寝た切り老人とか身体の不自由な老人とかは、そういう隣近所の助け合いがあるからこそ、老人ホームに行かないで、できるかぎり自分の住み慣れたところで住んでいくことができるんですね。

【ベスター】隣同士、近隣社会の人間関係がない社会は人間の社会ではないですね。

【プラース】そうですね。

【ベスター】何か起こるとすぐ団結する可能性があればあるほど、コミュニティの意識が残っているのだと思います。

【プラース】社会というものが根本的にどういうものであるかというと、人間のお互いの信頼感が一番大事だと思う。だから、おっしゃるとおり、日常的にはあまり付き合っていないけれど、とにかく異常な場合には助けてくれるという、そういう信頼感がなくなると人間らしく生活できない。

【加藤】まあ人間がお互いいっしょに生きていくためには、ふだんはあまり付き合いがないにしても、いざというときに何らかの形で近所の人が、とにかく手をかしてくれるだろうと思いますし、手をかすことになるんじゃないかなと思います。

今日はずいぶんいろいろ、おもしろいお話をうかがいました。本当にありがとうございました。

（この記事は放送大学特別講義を収録したものです）

『コミュニティ』『高年齢を生きる』特集テーマ一覧

昭和三九年春に第一号が発行された『コミュニティ』誌も、本号で第一〇〇号を数えるに至りました。この間、昭和四六年から六三年まで別に刊行いたしました『高年齢を生きる』誌二九点を加えますと、合計一二九点に達します。そこで、これまでの両誌でどのような内容が扱われたかを見るために、各号メインテーマの一覧を作ってみました。二つ以上の項目にわたる号は、それぞれ重複して掲出しました。ご参考になれば幸いです。

なお、リストの中で「高第○号」とあるのは『高年齢を生きる』のバックナンバーです。

（財団法人　地域社会研究所）

A　総論

第1号／コミュニティのあり方
第8号／日本人のつきあい
第20号／ヨーロッパを考える
第28号／わがコミュニティ
第32号／コミュニティと広場
第40号／コミュニティ――10年
第43号／CATVとコミュニティ
第47号／わがまち――その財政
第61号／コミュニティ・センターの評価
第78号／東アジアの地域社会
第86号／企業と地域社会
第100号／日本のコミュニティ

B　都市、町と地域

第4号／都市生活とコミュニティ
第24号／団地生活を考える

第27号／地方都市とコミュニティ
第59号／まちづくりの実験
第70号／商店街
第72号／集合住宅
第79号／町内会
第84号／都市化と寿命
第87号／都市とお墓
第90号／ディズニーランドのまち
第96号／市民農園
第98号／青年会議所

C　農山漁村と地域

第2号／新しい農村生活
第22号／千代田地区保健活動10年の総括
第23号／創造的農業者
第52号／山村女性の生活変動
第57号／川とコミュニティ
第62号／食料問題と農業のゆくえ
第71号／ある漁村社会の移りかわり
第82号／ササニシキの村に生きて
第83号／むらづくり
高第14号／兼業農家のお年寄りたち
高第17号／農村高齢者の移りかわり
高第26号／大井町のお年寄りたち

D　生活環境

第14号／交通安全とコミュニティ
第21号／公衆衛生
第30号／自然と人間
第38号／災害とコミュニティ
第44号／ゴミを語る
第50号／人間の居住環境とコミュニティ
第52号／山村女性の生活変動
第64号／コミュニティと生活道路
第95号／公共トイレを考える

E　住まい、設備

第26号／日本人の暮らしと住まい
第51号／身のまわりの安全
第54号／手づくりの地域文化
第73号／住みよい暮らし
第74号／住区と施設
高第18号／高齢者のための住宅

F　健康、保健

第13号／健康なまち
第19号／精神衛生
第37号／社会と健康
第48号／保健・福祉とコミュニティ・オーガニゼイション
第65号／新しい地域保健をめざして
第67号／健康と食生活
高第6号／高齢と体力
高第21号／高年齢者と食事

G　家族、家庭

第3号／地域社会と婦人
第5号／家庭のしつけとコミュニティ
第9号／家族と親族

第16号／テレビと家庭生活
第17号／家庭婦人の学習
第29号／家族はこれからどうなるか
第35号／主婦と生活時間
第36号／おやじの座を語る
第46号／親族の諸相
第55号／各国家族の新しい動き
第60号／主婦と職業
第66号／夫の役割・妻の役割
第75号／昔の主婦と今の主婦
第76号／東アジアの家族問題
第94号／日・中・韓の家族とコミュニティ
第97号／現代結婚考
高第2号／高年齢者と家族
高第5号／オーストリアの高齢者と家族
高第11号／同居の知恵・別居の知恵
高第23号／現代老親扶養論

H　高齢者

第6号／老人問題とコミュニティ
第45号／社会福祉の国際比較
第88号／退職者の暮らし
第91号／お年寄りの人間関係
第93号／お年寄りの使いやすい品物
高第2号／高年齢者と家族
高第3号／定年
高第4号／高齢者の生活記録より
高第5号／オーストリアの高齢者と家族
高第6号／高齢と体力
高第7号／お茶の水出の50年
高第8号／のぞまれる高齢者の学習
高第9号／楽寿の哲学
高第10号／思い出は遠くまた近く
高第11号／同居の知恵・別居の知恵
高第12号／寿命世界一をめぐって
高第13号／年　金
高第14号／兼業農家のお年寄りたち
高第15号／働く力——高齢者
高第16号／高齢者問題にどう答えるか？
高第17号／農村高齢者の移りかわり
高第18号／高齢者のための住宅
高第19号／高齢者とレジャー
高第20号／ぼけないための暮らしと工夫
高第21号／高年齢者と食事
高第22号／年金—その新しい仕組み
高第23号／現代老親扶養論
高第24号／続　現代老親扶養論
老人生活の国際比較
高第27号／ボランティア活動

I　青少年、教育

第7号／コミュニティと青少年
第10号／健全な子どもの育成
第11号／今日の教育を考える
第17号／家庭婦人の学習
第31号／子どもの遊び場

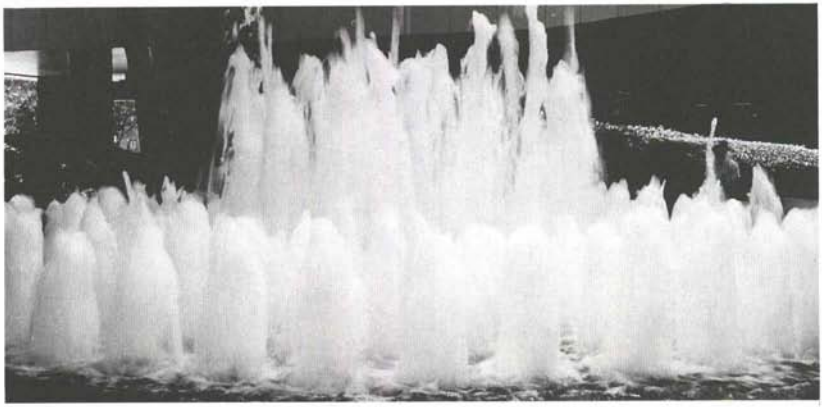
第39号／日本の青年
第58号／日本の高校生・アメリカの高校生
第63号／コミュニティと生涯教育
第68号／子どもと教育
第77号／少年非行
第81号／三つ子の魂百まで
第99号／小学生

J　人生、人口、言葉

第15号／日本人のことばと話し方
第34号／ことわざとコミュニティ
第41号／民話とコミュニティ
第69号／ことばと社会
第84号／都市化と寿命
第85号／国際化と日本語
高第1号／高年齢人口の問題点
高第9号／楽寿の哲学
高第25号／八十にして伝う
高別冊／各国人口の高齢化
高別冊2／世界の人口像

K　その他

第12号／レクリエーションとスポーツ
第18号／公共の場におけるマナー
第25号／食生活を考える
第33号／乗物と人間
第42号／余暇とコミュニティ
第49号／企業とコミュニティ
第53号／近所づきあいのコツ
第56号／コミュニティと土地利用
第80号／日米コミュニケーション考
第89号／科学と暮らし～21世紀への展望
第92号／地方紙の時代



●教育じろん――9

お母さんと塾教育

現代は〝母子のふれあい〟がかなり不足している。
このままでよいのだろうか。
子どもの立場に立って、もう一度考えてみることが求められている。

村田　博

むらた・ひろし
ライフデザイン研究所
特別顧問

孫が小学校へ入学することになって、受験戦争が就学前の子供にまで拡大されている現実に驚いた。親たちは、小・中・高一貫教育の学校へ入学させたがる。そうした私立校や国立大学付属校へ殺到するから受験戦争が激しくなる。孫の所へも進学塾から沢山DMが届けられた。曰く「三才児では遅過ぎる」、曰く「英才児教育はこの道しかない」などと親たちをドキリとさせる文句が書かれている。不安になった親たちは、競って塾に子供を入れる。中には、二つも三つも塾へ通わせる親もある。わが家では、幸か不幸か孫を塾にやらせなかったが、娘の話によると、世間の常識に反している気配をいつも感じたという。

ところが、小学校の入試スタイルが、今年から一部ではあるが、様変わりした。某大学の付属小学校を受験した孫の体験では、ペーパーテストが全くなくて、三時間ばかし「探険ゴッコ」をして遊んだだけであった。棒登りや平均台渡り、童謡を合唱したり、工作したり、途中でせんべいとお茶を頂いて、孫は結構楽しんで帰ってきた。その間に、先生方が子供の遊び方の能力、言葉の表現力、友だちとのつき合い方、食事のマナーなど採点されたようである。

このような子供の自然体のテストであったから、塾

教育は、余り成果がなかったと見られる。学校側が塾教育に批判的な姿勢を示したとも言えよう。偏差値教育は問題が多いと言われながら、就学前の児童にまでこれを及ぼすことは、確かに見直さねばならないことである。新しい入試スタイルは、他の付属小学校でも採用されていた。お母さん方も、こういう傾向に注目して、子供の教育を考えて頂きたいと思う。

さらに、この機会に申したいことがある。お母さん方は、自分の子供のことは、一番よく承知しているはずである。にも拘わらず、子供の個性を無視して、お隣がやっているからという理由だけで塾に通わせるのは、いかがなものであろう。子供の短所や足らざる部分を理解した上で、それを塾教育によって補てんされようとするならば、まだしもである。子供を塾に入れて、親の責任を回避したり、教育への自信のなさをカバーしようと考えておられる方々が多過ぎる。

塾教育は、基本的にビジネスである。それ故に、画一的な知能教育を与える場にはなれるが、ひとりの子供の人間形成や生活者の基礎を作ってくれる所ではない。中には、人間教育を重視すると稱する塾もあるようだが、愛情をもって、子供をウォッチする母親には、敵うべくもない。

昔から「子供は、親の後姿を見て育つ」と言われている。子供は、その視野の中で絶えず母親の姿を追い、また母親はいつも自分も見守ってくれるという意識があって、情緒が安定し、心が落ち着く。そんな安心感と信頼感から子供の自立心も生まれてくる。母親が料理やお掃除をしたり、読書をしたり、ピアノを弾いたり、植木に水をやる姿は、子供にとって最高のお手本である。料理の好きな子供、心やさしい子供、音楽の好きな子供、本をよく読む子供などは、母親の作り出す家庭環境の中で育ってくるものであろう。

そんなことを言っても、現代のお母さん方は、余りにも忙しい。特に働いているお母さんは、子供のことを忘れていないが、構ってやれる時間が少ないとおっしゃるかもしれない。しかし、子供から見れば、母親が側にいて、親子の触れ合いの時間が長いほど幸せであるという事実は、否定できないであろう。

母親にしかできない役割を幼稚園や保育所・塾やお稽古ごと教室に求めても無理である。母親が側にいないときの子供の傷みをまず理解した上で、それではどうするか、という視点がいま求められているのではないだろうか。

●シルバー通信

"人並み"に生きる

家事、育児、老親の介護は、特に仕事をもつ女性にとって重い負担である。しかし、そのどれもが、暮らしには当然伴うことではないだろうか。それらを除外してしまったら、もうそれは"人並み"の暮らしではない。

金森トシエ

かなもり・としえ
県立かながわ女性センター
顧問・前館長
元読売新聞社婦人部長

一人娘が結婚して家を離れ、翌年夫が癌で五十八歳の生涯を閉じた。それから母と二人の暮らしが十五年あまり続いている。

夫を亡くした思いはさておき、それからしばらくの歳月は仕事に追われる私にとってまことに都合よく流れた。私が勤めから帰ると、当時まだ七十二歳だった母が買い物をすませ夕食をととのえて待っている。お風呂も湧いている。私は申し訳程度に台所の後片ずけをする程度で役目はすんだ。朝も同様で、私はいわば世の〝男並み〟の日々を過ごしていたのである。

新聞記者時代、女性記者たちは男性記者たちがなにげなくかわしている会話に、ときに舌打ちしたい思いで目配せしあうことがあった。彼らの会話は前夜のテレビで楽しんだプロ野球のゲーム評や奥さんの〝内助の功〟ぶりへの、多くは不満などだったが、ことに前夜の夕食が気に入らず外へ飲み直しに出かけたなどという話が耳に入ると、子育てまっ最中の女性記者の眉は吊りあがった。

「えらそうなこと、言っているじゃない？　こっちは飛んで帰って夕食をつくり、子供に食べさせ、そのあとお風呂に入れて寝かせつけて、台所の後片ずけ、洗濯……。テレビどころじゃないのにねぇ」

女同士ひそひそぼやき「そんなに家でらくしているくせに、あの程度の原稿しか書けないのかしら」などと、過激なせりふを吐くひともいたりした。

だが、やがて月日は流れ、彼女たちより年長の私は

ひと足先きに娘が巣立ち、やがて母と二人の暮らしになり、昔うらやんだ〝男並み〟の日々を送るようになった。

しかし、また歳月は流れた。口と足が達者なことで親戚中に定評のあった母が、八十歳を過ぎると共にまず足が弱くなり、一人では外出できなくなった。ついで夕食の支度をおっくうがるようになり、私が帰宅後着がえもそこそこに台所へ立つようになったのは五年ほど前のことであったろうか。

そのつぎは私が仕事に出たあと、母は自分の昼食の支度もできなくなった。私は朝、出勤前に母の昼食も用意しなければならなくなった。こうして私はだんだん忙しくなった。昔の女性記者時代のぼやきあいが胸に浮かび、ただし子育てが老親の介護に代わり、若い母親から自身老いを迎える年代に代わったぶん、胸にうずく思いは深くなった。

昨秋、母は満八十七歳の誕生日を迎えた。私は数え八十八歳・米寿と重ねて祝うことにし、市内の小料亭を予約し親戚に案内状を出した。そして母を下見に連れ出し、お手伝いの女性と三人で懐石弁当をとり、母も「おいしい」と満足のようすであった。

ところが翌日、母はそれを全く記憶していなかった。それまで母の物忘れや思い違いの度合いは増してはいたが、まるごとすっぽりの記憶喪失は初めてであった。母の本格的な老いの症状に、私は初めて涙をこぼした。

二度目の涙はことし一月、母が私を親戚の別の女性と思い込んだときであった。私は家事と母の介護の助け人として家政婦さんなど三人を頼みローテーションを組んでいたが、さらに市内の老人ホームのデイ・サービスとショート・ステイの利用を申し込み、七月ようやく承認された。しかし始めてのショート・ステイの翌日、気になるあまり私は仕事をやりくりして母の様子を見にいった。

私を認めた母は、ほっとした様子で私を呼んだ。

「お母さん！」

私はびっくりし母の顔をのぞき込んで言った。

「私よ、トシエですよ。トシエってあなたの何なの？」

母は幼児のような笑顔で再び答えた。

「お母さん！」

私は三度目の涙をこぼしていた。

家事、育児、老親の看とり——仕事を持つ女性にとって重い負担である。しかし、そのどれも人の暮らしに当然伴うことである。それらを外した〝男並み〟の暮らしは〝人並み〟ではない。男も女も社会のサポートを得ながら〝人並み〟に生きたいものである。

●家族の風景——13

家族の範囲

娘は、自分の母親を家族員と考えるかもしれないが、娘の夫は考えないかもしれない。
アメリカなどでは同性愛者の家族も多くなっている。
最近の家族の定義は、その人が家族と決めた範囲を言うようだ。
それを決めるのは、本当に難しい。

牧野カツコ

まきの・かつこ
お茶の水女子大学助教授

毎年暮れになると、年賀状を書くのに追われる。何とめんどうな悪しき慣習と嘆きつつも、やっぱり慣習にしたがって、出したりもらったりするのを結構楽しむ人は多いと思う。

「ペットのネコと小鳥が死亡しましたので、喪中につき新年のご挨拶を遠慮します」という葉書が暮れに届いた、とある友人から聞いた。普段は「喪」に服するなどということとは無関係に暮らしているのに、年賀状の時だけ喪がでてくるのもおもしろいが、それにしても、猫と小鳥は重要な家族員だったのだ。その喪中の人は一人暮らしなの、とたずねたら、ご夫婦二人の暮らしだそうな。

私の友人で、ご夫婦二人の暮らしで猫を一匹、とてもかわいがって育てている人がいる。たまたまご主人の出張と彼女の宿泊セミナーなどが重なると、彼女はそわそわして、猫が心配だからと早めに帰ってしまったりする。猫への心配りがいつもあまりにも細やかなので、「まるでお子さんみたいね」といったら、彼女は「お子さんみたいじゃないの、私の子どもなの」と真剣に反論した。その言い方があまりにもキッパリとしていたので、私はその時、そうか「猫は彼女の子どもなのだ」と、素直に納得してしまった。

卒業生からの年賀状で、結婚して子どもができた人などは、たいてい夫と妻と子どもを入れて家族全員の名前を書いている。家族全員の写真を印刷した葉書もある。わが家の年賀状も、子どもが小さいときには、

娘が家族全員の似顔絵を描いてくれたものを使ったりしたものだった。しかしやがて、子どもは大きくなってくると、家族の絵を書くことも、親と一緒に名前を載せることも拒否するようになる。自分は自分の年賀状を作るから、余計なことはしないで欲しいと言う訳である。知り合いのお医者さんは毎年大学生と高校生の息子さん三人を入れて、ご家族五人が仲良く写っている写真を使った年賀状を作っていらっしゃる。なかなかいいなあ、とうらやましい。

アメリカからくるクリスマスカードには、結婚をした息子さんと娘さんのご家族も含めて、いつも賑やかな写真のコピーとそれぞれの名前のはいったものがある。アメリカでは、クリスマスの挨拶状に、家族の一人一人の一年間のできごとを親しい友人に知らせる手紙を作る人が多いようだ。結婚をして遠く離れている子どもや、離れて暮らしている年老いた両親のようすなども書く人が多い。送る相手の範囲が違うということもあるだろうが、日本の個人名の年賀状とはちがって、アメリカ人の〝家族〟への思い入れの強さを、ひしひしと感じさせられる。

〝家族〟の定義は、日本の社会学では、ひと昔前には、「夫婦を中核として、その近親の血縁者が住居と生計を共にして生活している小集団」であるとされていた。しかしこの一九五〇年代の定義は今はあまり使われていない。下宿や単身赴任などが増えて、家族員が住居と生計を共にしないことも多くなってきたし、家族が近親の血縁者だけで成り立つとも限らなくなった。アメリカなどで多くなっている同性愛者の家族も、家族の定義を難しくしている。

長男の家族と折り合いが悪くなって娘夫婦のところに引き取られることになった母親の場合、娘は母親を家族員と考えるかもしれないが、娘の夫は、家族員とは考えないかもしれない。当の老いた母親はどちらを自分の家族と考えるのだろうか。ご主人の仏壇をもって来ているかどうかによるのかもしれないし、同居期間の長さにもよるかもしれない。あるいは老いた母親にとっては、同居の有無にかかわらず長男も娘も家族なのかもしれない。そのとき、長男や娘の配偶者は家族なのだろうか、孫はどうなのだろう。

猫が家族であるかどうかも含めて、最近の家族の定義は、その人が〝家族〟と考える範囲が〝家族〟であるということになっている。それにしても、その範囲はどうして決まるのか、本当に難しい。

子供ではない、年寄りなんだ

人は、年をとることだけでなく、生きてきた姿に合わせて老人になる。
老人を「二度童」などと、誰が言い始めたのだろう。
子供が小さい大人ではないのと同様に、老人も子供ではないのである。

服部万里子

はっとり・まりこ
服部メディカル研究所
所長

老人を「二度童」とはだれが言い始めたことなのだろうか？

子供が小さい大人でないのと同様に、老人もまた子供とは全く異なる〝人〟である。

歩きが不自由になることや、排泄コントロールができなくなることをさして〝子供〟と同一視することは大いなる偏見と言わざるを得ない。偏見も多くの人が言いだすと〝常識〟になってしまう。

これは大変恐いことだと思う。

反面、「年をとったら〝かわいい老人〟になりたい」と口グセのように言う人がいる。これも生活の知恵かもしれないが、こう言っている人ほど「おんぶに抱っこ」で寝たきりになることが多い。

『老い』をうけとめることは誰でも嫌なことであろう。ことに老人がみじめに見える社会ではなおさらである。

リタイア後の人生が三〇年近くなった今日では、人生設計のプランニングの軌道修正が必要になってきている。

人生五〇年から人生八〇年への切りかえである。

そして『老い』を拒否するのではなく、「上手に『老い』とつきあう」ことである。

寝たきりや痴呆を心配するあまり、不安の中で年をとることほど不幸なことはない。痴呆になれば自分が痴呆ということを理解できなくなるので、今から心配してもどうしようもないのではないか……このような割りきりも必要であろう。

六月に全米退職者協会の定期大会に参加をした。三～四万人がテキサス州のサンアントニオに集合した為に、まさに〝老人パワー〟に街が占領されたようであった。

この大会の参加者は平均年齢では七〇代の後半であろうと思われる。それがとにかく元気でしかも素敵だったのが印象に残っている。

早朝エクササイズに参加し、レストランで交流し、セミナーでは質問が次々と出され、夜は杯をかたむけている。それぞれの老人が胸にはＡＡＲＰ（全米退職者協会）の参加証を勲章のように掲げている。会場以外の場所でもこの勲章を外そうとはしない。誰もが〝老人〟であることに誇りを持っているのである。

ＡＡＲＰは年間五ドル（八〇〇円程度）で会員になることができる。決して裕福な人々の団体ではない。アメリカと言う国で老人は必ずしも恵まれた存在ではない。

その国で老人達が元気でたくましく感じられるのは、それなりに〝老い〟をうけとめてどう生きたら自分にとって善なのか、豊かなのかを日常的に考えているからであろう。日本の中で老後を暗くしているのは他ならぬ老人自身にも原因があるのではないか？自分勝手なタブーをつくり、その中にとじこもり、なかなか出ようとはしない。「年よりの冷水」や「年がいもない」と言うことは人生五〇年時代の〝常識〟であり、変えて良いと思う。

人を愛することや性を楽しむこと、美しく装うこと、素敵に日常生活を楽しむこと、孤独に強くなること……これからの老人は従来のタブーをくつがえすことから、新しいリタイア後の生活の価値観をつくり出す作業にとりかからなければならない。

冒頭の言葉は〝フライド・グリーン・トマト〟と言う最近のアメリカ映画の中の言葉である。

八〇すぎの老女に対して、その家が古くなり取り壊されたことを〝心配かけまい〟と言わなかったことに対して、その老女は〝私は子供じゃない、老人なのヨ〟と主張するのである。

いよいよあと十余年で、団魂の世代がリタイアしてゆく。新しいシニア時代の幕開けである。

今から十年間に私達がこの新時代の土台をつくり上げてゆくことはとても楽しい仕事である。

人間は生きてきた姿に合わせて老人になる。決して年をとって初めて老人になるのではない。今の生き方が素敵かどうか、自己チェックしてみることも必要ではないだろうか。

●コミュニティ入門　4（最終回）

きまったコース

山口瞳さんのエッセーには、あたたかい人々がたくさんでてくる。どうしたら、そんな町に住めるのだろう……。まず、町内のゴルフコンペに参加してみることにした。

四方　洋

しかた・ひろし
(株)IBC専務取締役

山口瞳さんの「男性自身」は『週刊新潮』で一五〇〇回近く続いているコラムだが、毎回、山口さんの住んでいる国立の住人が登場する。

日常のコースになっている喫茶店とか、飲み屋が出てくる。おなじみの店ばかりである。

「ロージナで珈琲。紀ノ国屋でイギリスパン。旭薬局でシュガーレスキャンディ。暑いなかを精力的に歩き廻っているようにみえるけれど、実は、それぞれの店で一息いれて次の店へ行くという按配だった」(平成四年九月三日号)というぐあいに。

山口さんは「サントリークォータリー」の四十号で、国立のいきつけの店「谷保の文蔵」のことを書いている。山口さんは国立に住むようになって、まずやったことは町中をくまなく歩くこと、客が来たときに案内できる店を探すことだったという。

「文蔵」の名物はもつ焼きだが、主人は三十七才のときに会社をやめて店をはじめた。山口さんは書く。

「僕は、この町で、喫茶店のロージナ茶房、書簡集、Catfish、繁寿司の寿司、鰻の押田などを発見し親しくなることができた。これで充分だ」

そのうえに「文蔵」の主人、この人をモデルにして山口さんは「居酒屋兆治」を書いた。映画にもなったが、テレビドラマのときは町の人たちも出演した。そのさわぎは「男性自身」に書いてあったが、筆者を含め、町の人たちの興奮している様子が短い文章に脈打っていた。

このコラムの読者は、山口さんに案内されて「文蔵」や「ロージナ」をなじみにしている。こんな生活が送れたらいいなと思って読んでいる。銀座や新橋だけでなく、自分の住んでいるまわりに気軽に寄れる店があったらいいな。それも店の人がいい人で、友だちになれたらいうことはない。

代々木上原に住んで二十年近くになるが、おなじみの店はない。ただ日曜日などほぼ定まったコースを通っている。駅の近くで立ち寄るケーキ屋さんがある。コーヒーを飲めるがケーキを三つ、四つ買っただけですます。ゴルフの練習場もよく行く。50ヤードしかないトリカゴの練習場だが、午後行くと満席である。スポーツ紙を見ながら三十分から一時間待つ。

最後の仕上げは書店である。買う当てがなくても三十分以上店内に立っている。どんな新刊が出ているのか、情報収集が主だが、二、三冊は衝動で買ってしまう。

書店で時間をすごすクセは母がつけてくれた。中学に入ったときだったろうか。母は「本だけはいくらでも買いなさい」といった。町内の火星社という本店で読みたい本があればすべてツケにして持ってきていいと宣言したのである。

自分の本棚から抜くようにして読みたい本を漁る。机に積んだだけのものもあったが、受験期は参考書の山ができた。月末になると火星社のおやじが母のところへきて集金していった。

そのころ兄弟三人が大学を目ざして勉強の最中だったから、本代もバカにならなかったと思う。まだ日本経済は混乱期、わが家の生活は決して楽でなかった。母はなにかの出費を削って、火星社のおやじに払っていたはずだ。

母が本を自由に買わせてくれたのは、それが勉強の足しになると信じたからである。家業が倒産して、旧制中学を一年でやめて、菓子屋に住みこみで働かなければならなかった夫を持つ女の執念は「息子は、なにがなんでも帝国大学に入れる」というものであった。

週に一回は、本屋に立ち寄ってしばらく過ごさないと落ち着かない。中学以来の習慣である。山口さんの、日常のコースと同じくらい意味を持つものになった。

立ち寄る店はいくつか出来た。しかし、山口さんのように親しい友は出来ない。本屋も、寿司屋も、喫茶店も、互いに顔は知っているが、親しく口をきいたことはない。ゴルフ練習場にコンペの案内が出ていた。参加しようかしらん。寿司屋の主人も参加するらしいし……。

雪はジャマかロマンか！ 雪国安塚のまちづくり

◉新潟県安塚町

日本有数の豪雪地帯である安塚町では、雪にこだわって、〝雪のふるさと・やすづか〟づくりをすすめてきた。この町づくりでつちかった自信と誇りが、〝ふるさと〟をさらに大きく発展させるだろう。

〝東京ド真ん中に雪国出現！〟

安塚町を語るとき、『サヨウナラ後楽園球場スノーフェスティバル』をぬきには語れない。昭和六十二年、旧後楽園球場（現在は東京ドームに生れ変わっている）に十トンダンプ四百五十台分の雪を運び込み、白銀の舞台で大パフォーマンスを演じた。奇想天外とも言われたこのイベントの裏には〝雪国からの挑戦〟というしたたかな心があった。

安塚町は新潟県の西南端に位置し、長野県飯山市と境を接している。日本有数の豪雪地帯で役場

サヨナラ後楽園球場
スノーフェスティバル

周辺（標高八〇メートル）でも二メートル、山沿いは四～五メートルに及ぶところもある。人口は昭和三十年の合併当時、一万一千人を数えたが、現在は四千五百人台まで減少し、二三パーセントに達している。農業の衰退、山間地多雪、高齢化、過疎……クドキはいくらでもある。かと言って何も変わっていないわけではない。

後楽園球場スノーフェスティバルに象徴されるように〝苦から楽しむ雪〟という心に心が少なからず変わっていったのである。毎年二月に行われるスノーフェスティバル、町内からスコップやスノーダンプを手に人々が集まり、各チームに分かれて一斉に雪像づくりを競う。三年連続豪雪の痛手の中から生れたものは、今までの発想をまさに逆転する「雪の宅配便」であり「田舎売ります」の企画。雪ダルマの形をした発砲スチロールに四季折々の特産品を詰め全国各地に雪国のロマンとメルヘンを送る。日本で初めての雪の商品化だ。さらに土地付きの空き家を売り出した「田舎売ります」の企画では、全国各地から問い合わせがあり、現在十世帯ほどの人が新住民となっている。そして、「サヨウナラ後楽園球場スノーフェスティバル」は、四万五千人の都会人が雪を満喫するとともに町の人口の三分の一にあたる千四百人もの住民が参加し、雪国・安塚を思う存分アピールした。確かに一連の企画は町の経済構造を変える力を持つことはなかったが、全国から一躍注目を浴びるようになり、「私のふるさとは安塚です」と人に胸を張って言える自信と誇りを持ったことは事実である。

平成二年十二月、国のリゾート指定を受けた町の主峰・菱ケ岳山ろくに「キューピットバレイ」というスキー場がオープンした。町が一〇パーセント出資して資本金四億円の会社を設立、約百億円が投資された。当町にとっては念願のスキー場であり、夏場も含め年間二十万人の集落を生んだ。社員はほとんど地元採用である。冬場の季節雇用も多い。

時期を同じくしてスキー場の中腹の温泉が湧出。住民の公募によって「ゆきだるま温泉」と名付けられた。平成四年二月、男女とも百人ずつが入浴できるジャンボな浴場がオープンした。スキー

雪の宅配便

場が一望でき住民や観光客の憩いの場となっている。今まで観光客はごくわずかだったこの町に、雪を利用したリゾートが出現し、にぎわいを見せている様相が住民の心に与える影響は計りしれない。

ところで、こういったリゾート計画は、企業本位のものではなく、町が打ち立てた〝雪国文化村構想〟に基づいたものである。行政と住民、そして企業が一体となって進めてきた。この文化村構想は、町全体を公園的イメージにしようというもので町内を六つのゾーンに定め、地域ごとに個性を生かしながら開発を進める。リゾートもその一ゾーンの中に位置付けられている。自分の住んでいるところぐらいは美しくしようということから運動が広がった「花いっぱい運動」そして平成三年十月に施行した「美しい安塚町の風景を守り育てる条例」いわゆる景観条例を制定したのも全町公園化の一つの具体化策である。この条例の特色は、たとえば伝統的な家並が残る地域やリゾート地のみを指定するのではなく、全町一律に網をかけたことである。新増改築する建物の屋根、壁の色の統一化、看板の材質、大きさ、色の枠決めなど、強制ではなく協力してもらおうというものである。

また、集落ごとに設置されているCI看板、〝蛍と親雪の里・石橋〟とか〝大杉の里・坊金〟など集落の個性化を図っている。三十六集落あるうち今年でほとんどのところに設置することになっている。

こうした地域づくりも、そこに住む人が基本であるし、町と連携をとることが大切である。当町では小学校区（七校区）毎に地域館を設け活動を行っており、行政と地域館とのパイプ役にコミュニティ推進員（役場内係長クラス十八人）制度を設けている。地域で開く会合や活動に出向き、耳を傾け行政に反映させている。

〝雪のふるさと・やすづか〟雪にこだわってまちづくりを進めてきたが、今までをあえて第一ラウンドと言うならば、これからは花開く第二ラウンドの始まりと言ってよい。

菱ケ岳「ゆきだるま温泉」

【読者の声】

昨今、「地球環境」という言葉をよく見、聞きする。今年六月、ブラジル、リオ・デ・ジャネイロで地球環境サミットが開催されたことが大きく影響しているといえよう。

確かに近年、地球をめぐる大気、海洋、生物などの汚染、破壊が重なり、相乗して地球自体がもつ自浄作用が低減し、また、温暖化が進むなど、危機感が地球環境破壊を改めて国際的な共通課題としてサミットの開催となったとみることができよう。勿論、この地球環境問題の提起は今にはじまったものではない。国際問題としても二〇年近く前からか、つとに警告されてきたことであり、現代人が、祖先から預かったこの地球を後代にどう継承するか、むしろ今日また改めて問われたものともいえる。

しかし地球規模という環境問題のマクロ性が私等の日常生活の中に、どう身近かなものとして受けとられているのか、いささか気になるところである。

ところで、職業柄、都市の緑についてみても都市化の著しい我が国の場合、常に都市は代償すべき緑化対策のないまま、緑の破壊、浸食の上に生成し、過密化を続けてきている。このため、大都市地域での砂漠化が進み、ヒートアイランドの現象が生じ温暖化が進行しているといわれる。

正に、このような事例は地球規模でのマクロ性を、他事として傍観できない切実な環境意識を必要とするものであり、市民一人ひとりが具体の実態認識に立って「地球にやさしい」環境づくりに心掛けるべきことを示唆しているかと思う。殊に、都市の緑化は地域共同体としての街づくり運動の中に生かされてこそ、たとえ小さな自然といえども、地域住民と共生する環境形成への大きな手がかりとなるに相違ない。地球環境に思いをいたし、着々と地域社会での実践活動を進めることが望まれるのである。*think Globally, act Locaiy* に代表される言葉こそ、地球を蘇生させるにふさわしい地域行動といえるのではないかと思う。

（財）都市緑化基金専務理事　川名俊次

☆コミュニティや福祉に関する話題やご意見などを、400字程度にまとめて、お寄せください。掲載させていただきました投稿者には、薄謝を謹呈いたします。

街角のホスピスをめざして

編＝西嶋公子
A4判・並製
288頁・2,060円
風人社
［目次より］
看護婦さんは自転車に乗って／ホームドクターの話を聞く／家での介護について・私の体験／高齢者社会と男達／ふれあい弁当を作り続けて／癌の傷みと心について／「畳みの上で大往生」／他

ホスピスというと、癌の患者さんばかり集まる暗い所というイメージを持つ人が多い。しかし、私は、イギリスやアメリカのホスピスを見学し、関係者の話を聞いていくうち、ホスピスとは、病に苦しむ人をもてなし、命を大切に生きる所、ホスピス精神とは、ケアの基本、思いやりもてなす心だと理解した。

「街角のホスピスをめざして」歩き続け、今回、暖家の会会員と共に「高齢化社会の生き方」セミナーを行った私の軌跡を以下にたどってみた。読んでいただければ幸いである。（「ホスピスについて」より）

パブリックアメニティ

監修＝戸沼幸市
A4判・並製
226頁・2,200円
ぎょうせい
［目次より］
こどもの意見を取り入れた広場『わんぱく天国』／廃熱利用の動植物園『温室植物園と淡水魚水族館』／歴史文化を生かした『谷中銀座商店街』／昔話の絵タイルをはめこんだ『桃園川緑道』／他

23区における農地は稀重な都市のオープンスペースであり、災害時の避難地である。

善い都市景観、美しい都市景観とは大勢の人間が集まって住む場合の相互信頼で表現されたものであり、エゴ丸だし、経済丸だしとは別のものがある。人間が〝住む〟ことに即して、安全で快適な空間であればそれは結果的に美しい景観をもっていよう。

総体として住み心地のよい社会空間、パブリックなアメニティのある都市空間づくりこそ今求められている。（「まえがき」より）

苦悩する農村

著＝蓮見音彦
四六判・並製
228頁・2,060円
有信堂
［目次より］
日本社会と農村の変動／戦後改革と農村の「近代化」／経済成長と農村の変容／農業政策の混迷と今日の状況／農村社会変動の論理　その再検討／他

日本農村が何故このような状況に追い込まれていったのかを明かにすることは、農村のかかえている悩みを理解するうえでぜひ必要なことと言わなければならない。

本書は、主要な農業政策の画期にしたがって、それぞれの時期に国家が農村に対してとった施策と、そのもとでの農村の状況を、農村社会学の研究成果を手がかりにして跡づけ、日本農村が今日のような状況にたちいたったのは何故であるかを考えようとしたことが、一つの特色であろう。

本書が、日本農村の現状について、そしてまた日本社会の今日までの展開の過程について、さらには、こうした問題に取り組む農村社会学の視角について、多少とも関心を引くきっかけになれば望外の幸せである。

（「はじめに」より）

健康と福祉のまちづくり

著＝朝日俊弘
四六判・並
204頁・1,600円
悠々社
［目次より］
高齢者の健康と福祉のための仕組みを考える／誰のため、何のための医療計画か？／新たな段階を迎えた医療計画／こう変わってほしい！これからの病院／あらためて看護婦のあり方を問う／他

最近あちこちで展開されている議論は、ともすれば九〇年代を通り越して一気に「二一世紀」を語ることが多い。

しかし、私たちはこれからの一〇年間、即ち一九九〇年代をただ単に二一世紀に至る過渡期としての一〇年間と見るのではなく、保険・医療・福祉の分野、とりわけ高齢者の「健康と生活」問題については極めて重要な決定――歴史的な選択がなされる一〇年間であると考えたい。

それ故、私たちはこれからの一〇年間を特に重視し、実践的にも運動的にもその中味が問われる時代と位置づけたいと思うのである。（「序章」より）

21世紀は個人主義の時代か

著＝ロナルド・ドーア
訳＝加藤幹雄
四六判・上製
254頁・2,300円
サイマル出版社
［目次より］
サッチャーの個人主義革命／個人主義と愛国主義／国民による差異の源泉／国民性説／日本的特質とは何か／消費社会か生産者社会か／そしてコミュニティは？／他

日本社会の国際化の真の試金石は、日本人が伝統的集団主義指向性を全人類的な博愛精神にまで昇華し得るか否か、という点にあることをドーア教授は示唆している。つまり「経済大国日本」が、広く地球コミュニティーの人びととの共感と憧憬がよせられるような普遍性の高い文化を創造し、人類文明史に大きな足跡を残すことになるのか、あるいは一過性の「日本株式会社」に終わるのかは、日本人自らの意志にかかるものであることを示唆しているのである。

日本語に精通されているドーア教授は、翻訳原稿に丹念に目を通され、特に日本の読者を意識して部分的な書き直しもされた。したがって、私は訳者というよりは、むしろドーア教授ご自身による日本語版づくりの手伝いをさせていただいたという感じがする。

（「訳者まえがき」より）

アメリカ　フィランソロピー紀行

著＝四方　洋
四六判・上製
228頁・1,300円
TBSブリタニカ
［目次より］
回想のアメリカ――サンヨーの相馬さん／「世界製」を送り出す――東芝、ソニー／小学校の人気スターたち――松下のKWN／財団・ユニークな視点――日立・東芝／他

この本は、IBCC（海外ビジネスコミュニケーション協議会）の事業の一つ、アメリカにおける日系企業の地域社会活動報告としてまとめたものですが、日本の読者にもぜひ知ってもらいたいと考え、出版しました。とりあげた企業は自動車ではトヨタ、ニッサン、ホンダ、エレクトロニクス・電気・機械では松下電器、ソニー、三菱電機、日本電気、日立、東芝、三洋電気などです。

東京で聞いていた日系企業への批判は、現地に行くと、「歓迎」であり、「日本人は信頼できる」になっていました。

IBCCは、日本とアメリカの市民レベルでの関係づくりに役割の一端をになうことができるよう努めています。私たちの意あるところをくんで、お読みいただければ幸です。（「はじめに」より）

【編集委員】
天野郁夫
荏開津典生
加藤恭子
戸沼幸市
藤原房子
前田和甫
牧野カツコ
松方　健
湯沢雍彦

【編集後記】

▼かつて地域社会（コミュニティ）は人間の自由を束縛するものと考えられた時期がありました。しかし、地域の人間関係を抜きにして、どのような人生もありえないことでしょう。そして今、高齢化社会や生きがいの問題ともからんで、コミュニティの再生が求められています。今号は、小誌一〇〇号の節目に、日本のコミュニティの過去と現在をテーマにとりあげてました。

▼今号から連載「教育じろん」「シルバー通信」の執筆者が変わりました。新たな視点から、教育や高齢化社会の問題を考えていきたいと思います。ご期待ください。

地域社会研究所刊行物No.141
コミュニティNo.100……日本のコミュニティ

1992年11月15日　発行
頒価　400円
発行＝財団法人　地域社会研究所
〒一〇〇東京都千代田区有楽町一―一三―一　第一生命館
電話〇三（三二一一六）七八〇四～五・七八二九　FAX〇三（三二一一六）七八〇六
取扱＝株式会社　国勢社
〒一〇〇東京都千代田区有楽町一―一三―一　第一生命館
電話〇三（三二一一二）三九一〇・三八九〇　振替＝東京2―376
制作＝学習研究社／地人館　印刷＝大日本印刷株式会社
落丁・乱丁があればおとりかえします。

©The Community Study Foundation
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

地域社会研究所について

この財団法人は、近代的かつ民主的な地域社会（コミュニティ）の発展に寄与する目的で、第一生命保険相互会社が剰余金の一部をさいて基金を提供して、昭和三十八年十月十日に設立されました。

その事業としては、

一、近代的市民意識で裏づけられた地域社会観念の確立についての調査研究

二、近代的地域社会観念の啓発と普及

三、近代的地域社会を形成する各分野の調査研究

四、前記の諸事業についての実験と指導

五、地域社会についての書籍、パンフレットの刊行

などを行います。

これらは、いずれも人間生活の全般にわたる大きな問題で、たいへんむずかしい問題でありますので、研究所の組織は、広く各分野にわたる権威者の方々をもって構成されております。

今後事業の成果により、わが国の地域社会における産業、文化、教育、福祉厚生、建設、自治などの面の諸問題がしだいに解明され、いささかなりとも、新しい日本の社会の実現と発展に役立つことを念願する次第であります。

なお、この研究所の役員は、つぎのとおりであります。（五十音順・敬称略）

理事長

西尾　信一　第一生命代表取締役会長

常務理事

松方　健　第一生命元部長

理事

青井　和夫　流通経済大学教授

磯村　英一　文学博士・東京都立大学名誉教授

櫻井　孝頴　第一生命代表取締役社長

高山　英華　工学博士・東京大学名誉教授

中根　千枝　東京大学名誉教授

並木　正吉　食糧・農業政策研究センター理事長

日笠　端　工学博士・東京理科大学教授

前田　和甫　医学博士・帝京大学教授

宮坂　忠夫　医学博士・女子栄養大学教授

湯沢　雍彦　お茶の水女子大学教授

監事

山口　正義　医学博士・結核予防会会長

山本　長弘　第一生命代表取締役副社長

評議員

天野　郁夫　東京大学教授

荏開津典生　農学博士・東京大学教授

奥田　道大　社会学博士・立教大学教授

加藤　恭子　上智大学講師

加藤　秀俊　社会学博士・放送教育開発センター所長

五代利矢子　評論家

三枝佐枝子　商品科学研究所所長

園田　恭一　保健学博士・東京大学教授

塚本　亮一　第一生命相談役

戸沼　幸市　工学博士・早稲田大学教授

内藤寿七郎　医学博士・愛育病院名誉院長

日端　康雄　工学博士・筑波大学助教授

藤原　房子　ジャーナリスト

牧野カツコ　お茶の水女子大学助教授

山口　喜一　東京家政学院大学教授

米林　喜男　順天堂大学助教授

顧問

矢野　一郎　第一生命相談役

●出版案内

以下の出版物は市販していませんので、購読ご希望の方は当研究所へ直接お申し込みください。（送料実費）

高年齢を生きる

A5判 頒価300円 ★印は品切れです

第1号 高年齢人口の問題点
第2号 高年齢者と家族
第3号 定年★
第4号 高齢者の生活記録より
第5号 オーストリアの高齢者と家族
第6号 高齢と体力
第7号 お茶の水出の50年
第8号 のぞまれる高齢者の学習
第9号 楽寿の哲学
別　冊 各国人口の高齢化
第10号 思い出は遠くまた近く
第11号 同居の知恵・別居の知恵
第12号 寿命世界一をめぐって
第13号 年　金
第14号 兼業農家のお年寄りたち
第15号 働く力――高齢者
第16号 高齢者問題にどう答えるか？
第17号 農村高齢者の移りかわり
第18号 高齢者のための住宅
第19号 高齢者とレジャー
別冊2 世界の人口像
第20号 ぼけないための暮らしと工夫★
第21号 高年齢者と食事
第22号 年金―その新しい仕組み―
第23号 現代老親扶養論
第24号 続　現代老親扶養論
老人生活の国際比較
第25号 八十にして伝う
第26号 大井町のお年寄りたち
第27号 ボランティア活動（最終刊）

『高年齢を生きる』は昭和46年の発刊以来、高齢者問題について、さまざまな角度から考察してまいりました。しかし、この問題は、地域コミュニティとの関わりが非常に深く、コミュニティとを抜きにして語ることはできません。

そこで、今後は『コミュニティ』誌の中で高齢者問題を取り上げることとし、第27号（昭和63年刊）をもって最終刊といたしました。

コミュニティ

A5判 頒価／第1号〜88号 300円、第89号から 400円 ★印は品切れです

第1号 コミュニティのあり方
第2号 新しい農村生活
第3号 地域社会と婦人
第4号 都市生活とコミュニティ
第5号 家庭のしつけとコミュニティ★
第6号 老人問題とコミュニティ
第7号 コミュニティと青少年
第8号 日本人のつきあい
第9号 家族と親族★
第10号 健全な子どもの育成
第11号 今日の教育を考える★
第12号 レクリエーションとスポーツ★
第13号 健康なまち
第14号 交通安全とコミュニティ
第15号 日本人のことばと話し方
第16号 テレビと家庭生活
第17号 家庭婦人の学習
第18号 公共の場におけるマナー
第19号 精神衛生
第20号 ヨーロッパを考える
第21号 公衆衛生
第22号 千代田地区保健活動10年の総括
第23号 創造的農業者
第24号 団地生活を考える
第25号 食生活を考える
第26号 日本人の暮らしと住まい
第27号 地方都市とコミュニティ
第28号 わがコミュニティ
第29号 家族はこれからどうなるか
第30号 自然と人間
第31号 子どもの遊び場
第32号 コミュニティと広場
第33号 乗物と人間
第34号 ことわざとコミュニティ
第35号 主婦と生活時間
第36号 おやじの座を語る
第37号 社会と健康
第38号 災害とコミュニティ
第39号 日本の青年
第40号 コミュニティ——10年
第41号 民話とコミュニティ
第42号 余暇とコミュニティ
第43号 CATVとコミュニティ
第44号 ゴミを語る
第45号 社会福祉の国際比較
第46号 親族問題の諸相
第47号 わがまち——その財政
第48号 保健・福祉とコミュニティ・オーガニゼイション
第49号 企業とコミュニティ
第50号 人間の居住環境とコミュニティ
第51号 身のまわりの安全
第52号 山村女性の生活変動
第53号 近所づきあいのコツ
第54号 手づくりの地域文化
第55号 各国家族の新しい動き
第56号 コミュニティと土地利用
第57号 川とコミュニティ
第58号 日本の高校生・アメリカの高校生
第59号 まちづくりの実験
第60号 主婦と職業
第61号 コミュニティ・センターの評価
第62号 食料問題と農業のゆくえ
第63号 コミュニティと生涯教育
第64号 コミュニティと生活道路
第65号 新しい地域保健をめざして

第66号　夫の役割・妻の役割
第67号　健康と食生活
第68号　子どもと教育
第69号　ことばと社会
第70号　商店街
第71号　ある漁村社会の移りかわり
第72号　集合住宅
第73号　住みよい暮らし
第74号　住区と施設
第75号　昔の主婦と今の主婦
第76号　東アジアの家族問題
第77号　少年非行
第78号　東アジアの地域社会
第79号　町内会
第80号　日米コミュニケーション考
第81号　三つ子の魂百まで
第82号　ササニシキの村に生きて
第83号　むらづくり
第84号　都市化と寿命
第85号　国際化と日本語
第86号　企業と地域社会
第87号　都市とお墓
第88号　退職者の暮らし
第89号　科学と暮らし～21世紀への展望
第90号　ディズニーランドのまち
第91号　お年寄りの人間関係
第92号　地方紙の時代
第93号　お年寄りの使いやすい品物
第94号　日・中・韓の家族とコミュニティ
第95号　公共トイレを考える
第96号　市民農園
第97号　現代結婚考
第98号　青年会議所
第99号　小学生
第100号　日本のコミュニティ（新刊）

コミュニティ叢書

No. 1 会社従業員の生活と意識—第一生命従業員調査—

編著＝青井和夫／発行＝地域社会研究所／取扱＝国勢社
A4判・184頁・頒価850円

都心部から近郊農業地帯（神奈川県足柄上郡大井町）に社屋移転した第一生命の全従業員と配偶者を対象にした調査と分析。

No. 2 大井町—地域社会の構造と展開（品切）

編著＝福武　直／発行＝地域社会研究所
発売＝東京大学出版会／B5判・720頁・頒価2500円

神奈川県足柄上郡大井町……第一生命の理想的な「まちづくり」構想による移転とともに進んだ都市化と社会変容の研究。

No. 3 都市生活者の生活圏行動—第一生命従業員調査—

編著＝高山英華／発行＝地域社会研究所／取扱＝国勢社
A4判・188頁・頒価1600円

東京のサラリーマンとその家族の日常生活と行動は？　行動地図、調査集計表を多数収録。

No. 4 大井町開発基本計画

編著＝日笠　端／発行＝地域社会研究所／取扱＝国勢社
A4判・128頁・頒価2000円

市街化が進む近郊農業地帯（神奈川県足柄上郡大井町）にみるコミュニティ・プランニング。

No. 5 恒心会員の歩み—岡山県の創造的農業者—

編著＝並木正吉／発行＝地域社会研究所／取扱＝国勢社
B5判・220頁・頒価1500円

優秀な若い農業者の歩みを十数年にわたって追跡。その業績を幅広い視野に立って評価。

No. 6 農漁村社会の展開構造—秋田県由利郡金浦町—（品切）

編著＝福武　直／発行＝地域社会研究所
発売＝東京大学出版会／B5判・380頁・頒価2800円

産業経済・社会・政治の諸構造をはじめ、生活改善・教育など広範な変化と現状を歴史的過程をふまえて論究。

No. 7 地域社会の形成と教育の問題—神奈川県大井町—

編著＝松原治郎・小野　浩／発行＝地域社会研究所
発売＝東京大学出版会／B5判・267頁・頒価2400円

都市化が進展する近郊農業地域における社会構造の変化を教育問題に焦点をあてて分析。

No. 8 農山村社会と地域開発—神奈川県大井町相和地区—

編著＝福武　直／発行＝地域社会研究所／発売＝東京大学出版会
B5判・410頁・頒価4500円

第一生命の進出、東名高速道路の貫通によって変容した農業地帯の諸問題を分析。

No. 9 企業進出と地域社会—第一生命本社移転後の大井町の展開—

編著＝福武　直・蓮見音彦／発行＝地域社会研究所
発売＝東京大学出版会／B5判・563頁・頒価6400円

第一生命本社移転から十年後、神奈川県大井町の地域社会はどのように変化し、当初の計画はどう具現されたか。

No.10 健康農村活動と地域社会—羽生市千代田地区—

編著＝青井和夫・宮坂忠夫／発行＝地域社会研究所
発売＝東京大学出版会／B5判・353頁・頒価7000円

昭和三十一年から十年間継続された健康農村活動を、その後十数年にわたって追跡調査。

No.11 学習社会の成立と教育の再編—長野県上田市—

編著＝松原治郎・久冨善之／発行＝地域社会研究所
発売＝東京大学出版会／B5判・510頁・頒価8000円

上田市の教育総合調査をもとに、学校教育をはじめ各種の教育の社会化の可能性を探る。

調査研究報告書

都市化と寿命の関係に関する研究
—東京都と大阪府の比較を中心に—

保健医療社会学研究会（代表＝園田恭一）
B5判・176頁・頒価2500円
全国的に都市化が進む今、それは寿命と健康にどう影響しているのか。各種統計を駆使して分析。

浦安市舞浜地域開発の影響調査

浦安地域環境研究会（代表＝米林喜男）
A4判・96頁・頒価700円
ディズニーランドとホテルの町に変容した千葉県浦安市。そこでの市民生活はどう変ったか。

大企業退職者の生活史と老後観
—ライフドキュメントと統計分析—

地域高齢者研究会（代表＝湯沢雍彦）
B5判・254頁・頒価1600円
サラリーマン、特に大企業勤務者は一般に地域社会との結び付きが薄いといわれる。彼らの退職後は？

高齢者の身体的機能の変化に対応する商品の調査研究

商品科学研究所（代表＝三枝佐枝子）
A4判・220頁・頒価3000円
高齢者が使いやすい品物の条件は何か。社会の高齢化が進展する今、望まれる商品の基礎研究。

講演録

歴史的時間と人生

グレン・H・エルダー、ジュニア
A5判・100頁・頒価900円

ハンガリーにおける高齢者の家族生活と自殺の問題

レズロー・チェースツォンバティ　監修＝青井和夫